

オホーツク遺跡街道構想
(第2版)

令和7年3月

目次

1. オホーツク遺跡街道構想とは	1
2. オホーツク文化の概要	1
(1) オホーツク文化の特徴	2
(2) 主なオホーツク文化関連遺跡	6
3. オホーツク遺跡街道について	13
(1) オホーツク遺跡街道とは	13
(2) 来訪者へ伝えたいもの	13
(3) オホーツク遺跡街道の範囲について	14
(4) 拠点エリアの設定	14
4. 拠点ごとの現状と今後の目標	15
(1) 網走地区	15
(2) 北見地区	16
(3) 紋別・興部地区	17
参考ルート例	18
5. エリア共通の整備計画案	26
(1) 主なハード事業	26
(2) 主なソフト事業	26
(3) ロードマップ	27
6. 事業の推進計画（管理運営計画）	28
(1) 事業推進体制の構築	28
(2) オホーツク遺跡街道推進ネットワークの今後の活動について	28

本構想は、観光庁事業「令和5年度 将来にわたって旅行者を惹きつける地域・日本の新たなレガシー形成事業」において北海道運輸局が実施した「オホーツク文化を核とした『オホーツク遺跡街道』構想事業」における各調査に基づいて、同事業の中でとりまとめたものである。事業の中で行った調査としては、①各遺跡および博物館における現状調査・②遺跡分布調査・③認知度調査・④先進事例調査・⑤専門家ヒアリング・⑥収支分析調査などがあり、その結果を本構想に反映または参考として一部掲載している。

1. オホーツク遺跡街道構想とは

オホーツク文化を体感できる面的な観光エリアである「オホーツク遺跡街道」の形成に向けて、地域の関係者が取り組むべき方向性をまとめたものである。

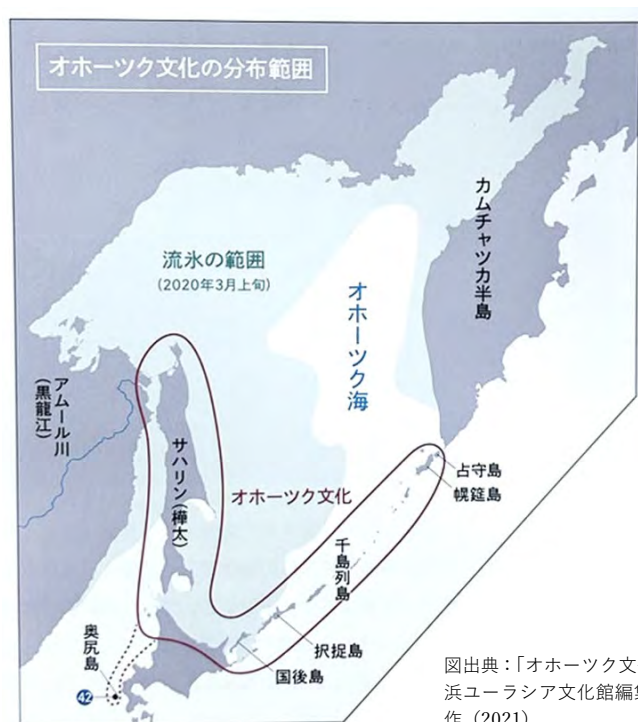
本構想では、オホーツク文化を観光資源として有効活用することを目的として、オホーツク文化人の風習や食文化などを後世に渡って引き継ぐことに加え、新たに観光の視点を加え整理するとともに、その活用方法や整備方針等を定めている。

また、オホーツク文化の詳細は地元でもあまり知られていないのが現状であるが、オホーツク文化を始めとした地域の歴史や文化に焦点をあて現代との関わりなどを再整理し、より多くの方々に知ってもらうことにより、地域の方々にとっての新たなレガシーとなることを目指すものである。

2. オホーツク文化の概要

オホーツク文化は、北はアムール川河口部からサハリン、北海道のオホーツク沿岸、千島列島に至る広大な地域に広がっており、北海道に分布する遺跡はその最南端にあたる。オホーツク文化の担い手であるオホーツク文化人は、もともと北海道に居住していた土着の縄文人や擦文人と異なった異民族で、西暦 400 年頃、暖かで豊かな北海道を目指して移り住んだと考えられている。

オホーツク文化人は、地面を五角形あるいは六角形に掘りさげた竪穴住居に住み、その中にはクマの頭骨を祀るなど動物に対する儀礼の痕跡が認められている。また、イヌやブタの飼育、芸術性の高い土器作りや彫像作り、大陸との交易の形跡など様々な特徴があり、縄文や擦文文化期の人々とは大きく異なる文化的な特性が認められる。



オホーツク文化は、大きく前期、中期、後期の3区分で整理され、前期は、宗谷方面から利尻島・礼文島、一部は奥尻島まで日本海を南下して居住していたが、中期はオホーツク海沿岸に住み着き、現在の枝幸町(目梨泊遺跡)と網走市(モヨロ貝塚)がその中心的な拠点となった。後期になるとさらに南下し、現在の斜里町ウトロ地区、標津町、根室市付近で、擦文文化と融合しトビニタイ文化へと変容しながら、その後のアイヌ文化の形成に深く関わっていくなど、北海道の歴史の中で重要な文化となっている。

(1) オホーツク文化の特徴

■北方異民族の文化

オホーツク文化は、5 世紀から 12 世紀まで（北海道では 5 世紀から 9 世紀にかけて）オホーツク海沿岸を中心とする北海道の北海岸・東海岸、樺太、南千島の沿海部で栄えた、高度な漁労、狩猟、採集を基本とする海獣狩猟民族（オホーツク文化人と称されている）の文化である。その遺跡は、国内では北海道北部・東部から千島列島にかけての海岸沿いに分布し、その遺跡からは、海獣狩猟や漁労などに用いられた多様な道具類が出土している。



海獣狩猟などに使われた鉆頭
東京大学常呂実習施設・北見市教育委員会蔵
(出典：東京大学学術資産等アーカイブズポータル)

■多様な食資源に支えられた食文化

遺跡の多くが海岸近くにあることから、海での生業に特化していたことがうかがわれる。礼文島の香深井 1 遺跡からは大量のニシンやホッケ、ウニ殻や貝殻が出土しており、魚を中心に食べていたと思われるが、特に流氷が押し寄せる道東部では海獣狩猟が盛んに行われているが、海獣は食料としてだけでなく、皮革や骨、油脂なども利用されていた。

このような海獣狩猟や漁労など海での生活を基盤としつつ、家畜としてイヌやブタも食糧にしていた。また、オオムギやアワ、キビなど大陸から渡来した穀物を栽培していた。



貝塚の地層イメージ



狩猟イメージ

(出典：2 点とも北海道観光機構公式サイト HOKKAIDO LOVE)



モヨロ鍋イメージ



枝幸町「ミュージアムえさし」内展示 「オホーツク人の食のイメージ」

■竪穴住居と動物儀礼

オホーツク文化人は、五角形または六角形の竪穴住居に住み、いくつかの家族が同居して暮らしていたものと思われる。住居の中央には炉があり、それを囲む床には凹字形で粘土が貼られている。住居の奥にはクマの頭骨を積み上げた骨塚が設置され、動物儀礼を行っていたと考えられる。

骨塚を構成する動物の種類はヒグマが最も多く、これに海獣（オットセイ、アザラシなど）やエゾシカ、キツネ、鳥類なども見られる。



骨塚（モヨロ貝塚 7 号竪穴）



オホーツク文化の竪穴住居
(トコロチャシ跡遺跡)

出典：「オホーツク文化」
横浜ユーラシア文化館編集・制作（2021）

(出典：2 点とも東京大学学術資産等アーカイブズポータル)

■オホーツク式土器の特徴的な模様

後期のオホーツク式土器には、貼付式浮文（「ソーメン文」）と呼ばれる細長い粘土紐を貼り付けた文様が多くみられる。また、海獣や水鳥などの動物意匠を付している土器も多い。

一方、同時代に道央部を中心に広がっていた擦文文化の土器は、ヘラ状の工具などで表面を擦ったような文様があることから「擦文式土器」と呼ばれている。



オホーツク式土器
(出典：文化庁 文化遺産オンライン)



オホーツク式土器
(水鳥の模様)



(出典：北見市 HP「ところ遺跡の森」関連ページ)

■動物意匠遺物

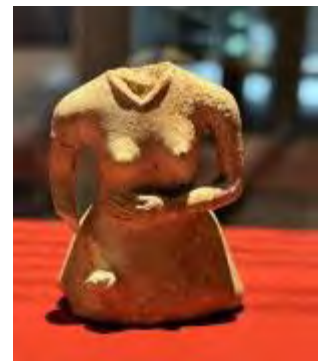
オホーツク文化の遺跡からは、ヒトを表現した彫像も見られるが、圧倒的に多いのは動物をかたどった彫刻である。これは、人と動物が近い関係にあったことを物語るとともに、アイヌ文化にも通じる様々な動物を神として祀る儀礼があったものと考えられる。いずれの彫像も芸術性の高いすぐれたものであることが大きな特徴である。



動物意匠遺物（ラッコ）
(出典：文化庁 文化遺産オンライン)



動物意匠遺物（クマ）（複製）



牙製婦人像（複製）
モヨロのビーナス（*）

（*）「モヨロ（北方）のビーナス（牙製婦人像）」：海獣の牙で作られた女性像、オホーツク人の信仰や儀礼に関わる重要な遺物であったと考えられる。

■周辺国との交易

オホーツク文化人は、海獣狩猟や漁労に長けていたことで、そこから得た毛皮などをサハリンや沿海地方（ロシア連邦南東端）、さらに本州方面との交易を行っていた。このことは遺跡から発掘された数多くの大陸渡来の金属器、本州方面からもたらされた青銅製品や玉類などからうかがえる。

<本州との交易を示す発掘物の一つ（蔵手）>



110-2 (参考) 蕨手刀 目梨泊遺跡第 34 号土壌墓出土
枝幸町教育委員会蔵・元興寺文化財研究所写真提供 国指定重要文化財

蕨手（わらびて）：古代の刀の一種。柄頭が屈曲して、早蕨（さわらび）の巻いた形に似ているので、この名がある。蕨手は、本州特に東日本で多く発掘されており、本州との交易により北海道にも持ち込まれたものと思われる

＜大陸との交易を示す発掘物の一つ（青銅製帯飾）＞



102-1 青銅製帯飾（複製） 目梨泊遺跡 包含層
オホーツク文化後期 長 5.7 cm
枝幸町教育委員会蔵・写真提供 国指定重要文化財

出典：写真 2 点とも「オホーツク文化」横浜ユーラシア文化館編集・制作（2021）

＜地元の高校生が発掘した金の刀と刀装具＞（かつての本州との交易品の一つと推定される）

2018年(平成30年)10月4日(木曜日)
北海道新聞(夕刊)
第3巻第10号

金色の刀 輝く大発見

⑤金で覆われ、花の文様が彫刻されている「足金具」
⑥つばが金で覆われている直刀(上)とさやの「足金具」2個(中央)と小刀(いずれも大島拓人撮影)

【枝幸】オホーツク文化(5～9世紀)の包含層内枝幸町北部の目梨泊遺跡で、金で覆われ、文様が彫られた刀装具が出土された。同文化期の遺跡からは刀剣が約40本見つかったというが、北海道博物館(札幌)の古刀啓館学芸員は「9世紀以前の道内で、金と文様装束された刀の出土例はなく、大変貴重」と話す。見つけたのは調査に参加した枝幸高生、思わぬ「お宝」に驚いていた。

オホーツク文化はサハリン南部から北海道北部・東部、千島列島にわたって存在した海洋民の生活様式。国の重要文化財第19号を含む遺跡が広がっており、目梨泊遺跡を、今年1月に枝幸町教委と大島拓人の共同発掘チーム、枝幸高生7人が調査し、発見した。

出土品は直刀(54センチ)と小刀(36センチ)、直刀のさや(木製)に

5～9世紀の目梨泊遺跡 道内初、金と文様

付いていた「足金具」と呼ばれる刀を握るための銅の留め金具(直刀の「つば」)と足金具の1個は、いずれも金で覆われ、花の文様が彫刻されていた。

町教委によると、刀装具は文様彫刻が約800年ほど前に製作され、本州との交易である可能性が高い。生産地は不明だが、刀装具の文様は、高度な技術を用いて製作されており、東大平遺跡の宝物と見られる文様類似しているという。

札幌学院大文学部の田嶋教授は「(遺跡の)奈良、平安時代でも全国的に見ても出土例が少ない貴重な刀。本州とついで、道内のオホーツク文化圏の中でも、枝幸の関が重要な存在だ」と話す。

刀装具を産出したのは枝幸高1年生で、地元自然や歴史を学んでいる総合文化探究部の広田敬典部長(17)と黒木謙副部長(17)が、5月から町教委と共同で発掘した。

「5月からは、オホーツク文化を学びながら準備を進め、初めての発掘に臨んだ。広田部長は「ジャベルで掘っていたらカンカン鳴ったので、黒曜石かと思ったが、まさか刀の金とばかりは」。

黒木副部長も「最初は刀と見えず土器の表面かなと思った。貴重な遺物を発見できてうれし」と笑顔で話した。

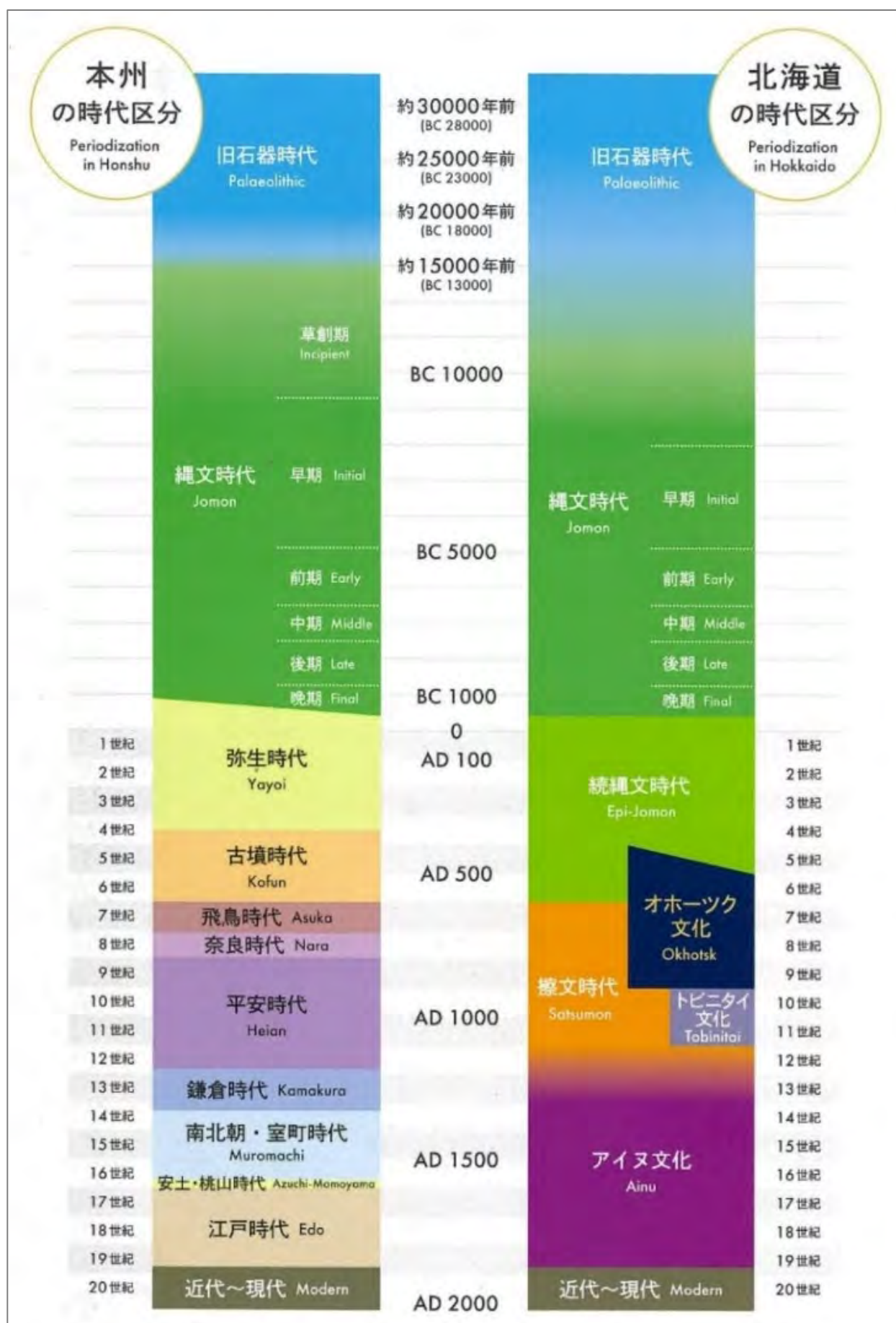
刀と刀装具は保存処置を行い、オホーツクミュージアムへ送り、来秋に公開展示している。

枝幸高生2人「びっくり」

目梨泊遺跡で見つけた刀や刀装具を指さす広田君(左)と黒木君

北海道新聞(夕刊)記事より（2018年10月4日掲載）

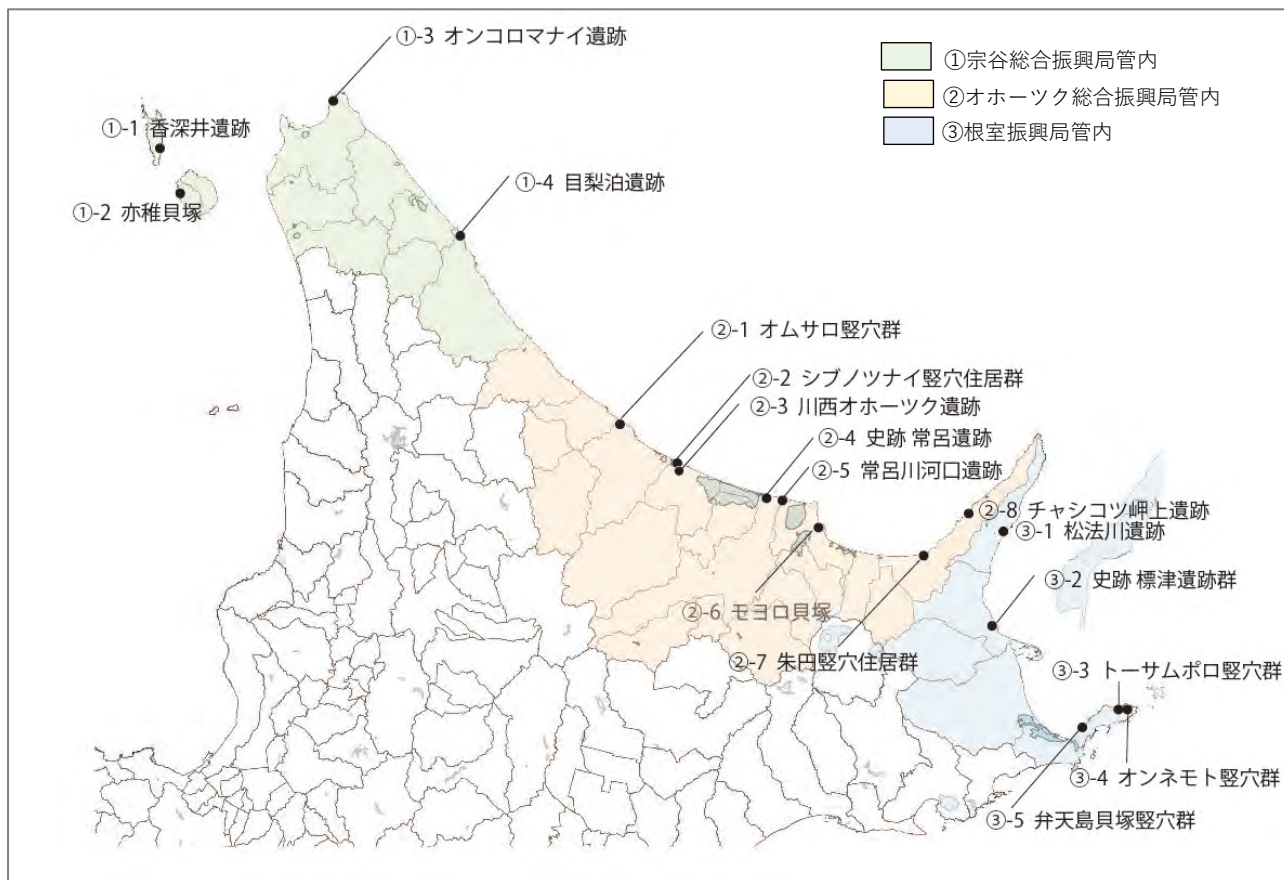
オホーツク文化の時代的な位置づけ



出典：「オホーツク文化」横浜ユーラシア文化館編集・制作（2021）

(2) 主なオホーツク文化関連遺跡

① 宗谷総合振興局管内のオホーツク文化遺跡の概要



遺跡名	所在地	概要	備考
1. 香深井遺跡 (かぶかい)	礼文町	8軒の竪穴住居跡、3基の墳墓及び石積遺構を発見された。その中から、ニシン、ホッケ、マダラなどの魚骨や、オットセイ、アザラシ類、クジラ、イルカなどの海獣類の骨、またイヌ、カラフトブタ、キタキツネ、ヒグマなどの骨を発掘された。	
2. 亦稚遺跡 (またわっか)	利尻町	1977年(昭和52年)にバスターミナルの改築工事に伴う発掘調査で遺物が出土した。オホーツク文化の層からは、オットセイやクジラなど海の動物を線で刻んで、模様をつけた土器類やカラフト豚の骨などが出土している。	遺物は北海道指定有形文化財
3. オンコロマナイ遺跡	稚内市	宗谷岬に近いオンコロマナイ川河口左岸にある3～4世紀頃の集落遺跡(オンコロマナイ2遺跡)。東大文化人類学教室の発掘調査によって縄文時代の層から5体の人骨が出土している。	
4. 目梨泊遺跡 (めなしどまり)	枝幸町	神威岬南西の海岸段丘上に位置する、オホーツク文化期の大規模な集落遺跡である。遺構としては竪穴住居跡6・土壌墓48基、土壌165基が検出され、これ以外に魚骨や獣骨を廃棄・堆積したブロック2か所が見つかっている。	出土品は重要文化財に指定



香深井遺跡出土品
(写真出典：礼文島遺産ミュージアム)



亦稚貝塚から出土した土器
(写真出典：利尻島郷土資料館解説シート)



目梨泊遺跡全景(2本の道路に囲まれた部分)
(写真出典：北海道デジタルミュージアム)

② オホーツク総合振興局管内のオホーツク文化遺跡の概要

遺跡名	所在地	概要	備考
1. オムサロ台地竪穴群	紋別市	縄文・続縄文・擦文・オホーツク・アイヌ文化期の住居跡が数多くあり、特に擦文文化期の竪穴住居跡やお墓の跡が計 208 軒残っている。	北海道指定史跡
2. シブノツナイ竪穴住居跡群	湧別町	オホーツク海沿いのシブノツナイ湖の北岸段丘上に、窪みで残った 665 軒の竪穴住居跡がある。多くは擦文文化期のものであるが、オホーツク文化期の住居跡も一部見られる。	北海道指定史跡
3. 川西オホーツク遺跡(かわにし)	湧別町	シブノツナイ遺跡に近接した続縄文・擦文・オホーツク文化期の集落跡地である。オホーツク文化を象徴するクマなどの彫像がここで発掘されている。	
4. 常呂遺跡(ところ)	北見市	縄文・続縄文・擦文・オホーツク・アイヌ文化期にわたる竪穴住居跡である。窪地になっている竪穴住居跡は 2700 棟にも及ぶ。	史跡(*)
5. 常呂川河口遺跡(ところがわかこう)	北見市	縄文・続縄文・擦文・オホーツク・アイヌ文化期の大規模遺跡である。竪穴住居跡のほか、土坑(墓など)、送り場遺構、土器・石器・木製品・骨角器・鉄器などが発見されている。	出土品は国の重要文化財に指定
6. 最寄貝塚	網走市	網走川河口の左岸(北岸)、標高 5 メートルの砂丘台地に立地する北海道におけるオホーツク文化の代表的な遺跡である。遺跡を展示したモヨロ貝塚館のほか、屋外展示としてオホーツク文化竪穴住居跡群、オホーツク文化墓域などがある。	史跡
7. 朱円竪穴住居群(しゅえん)	斜里町	海岸砂丘上の森の中に 700 基もあるといわれる窪んだ住居跡遺跡である。時代としては、縄文文化中期から続縄文・擦文・オホーツク文化期までである。	北海道指定史跡
8. チャシコツ岬上遺跡	斜里町	オホーツク文化終末期を中心とする拠点集落遺跡である。在地の擦文文化と融合し、地域性の強いトビニタイ文化が形成される過程を示す。	史跡

(*) 史跡：国や自治体が「文化財保護法」で指定した歴史的・学術的価値が高いもので、特に価値が高いものは特別史跡に指定されている。

備考欄において「史跡」と記載しているものは、国から指定を受けたものである。(次ページ③も同様)



シブノツナイ竪穴住居跡群
(出典：湧別町 HP)



常呂川河口遺跡
(出典：北見市 HP)



最寄貝塚(墓域)

③ 根室振興局管内のオホーツク文化遺跡の概要

遺跡名	所在地	概要	備考
1. 松法川北岸遺跡 (まつのりがわほくがん)	羅臼町	知床半島東岸の中央部に位置する遺跡である。 1982 年(昭和 57 年)、国道 335 号改良工事に伴って発掘調査が実施された。 7~8 世紀頃のオホーツク文化期の住居跡及び数多くの出土品がある。	
2. 標津遺跡群 (しべつ)	標津町	主に伊茶仁川、ポー川流域に分布する竪穴住居跡群の総称。遺跡群のうち「伊茶仁カリカリウス遺跡」、「古道遺跡」、「三本木遺跡」の 3 つの遺跡が史跡に指定された。 遺跡群全体で確認されている竪穴の数は 4,400 以上あり日本最大規模である。	史跡
3. トーサムポロ湖周辺竪穴群	根室市	根室半島の北側、トーサムポロ湖の開口部右岸の岬の端にある遺跡である。 A 地区の第 3 層からは、主にオホーツク文化期の竪穴住居跡・土坑墓・土坑・礫集中・骨片集中などが発掘された。	
4. オンネモト竪穴群	根室市	ノサップ岬の北方およそ 2 km の丘陵端部にある遺跡である。 かつてアイヌの集落があったと伝えられ、チャシも見られる。 遺跡は、オホーツク文化期の数件の住居跡と貝塚からなる。	
5. 弁天島貝塚 (べんてんじま)	根室市	根室港沖にある弁天島から発見された貝塚である。 1878 年(明治 11 年)にイギリス人地質学者ジョン・ミルンが発見した。島全体が貝塚となっていて、竪穴式住居から、ヒグマ・エゾシカ・アザラシ・クジラの骨や石器も出土した。	



松法川北岸遺跡の出土物



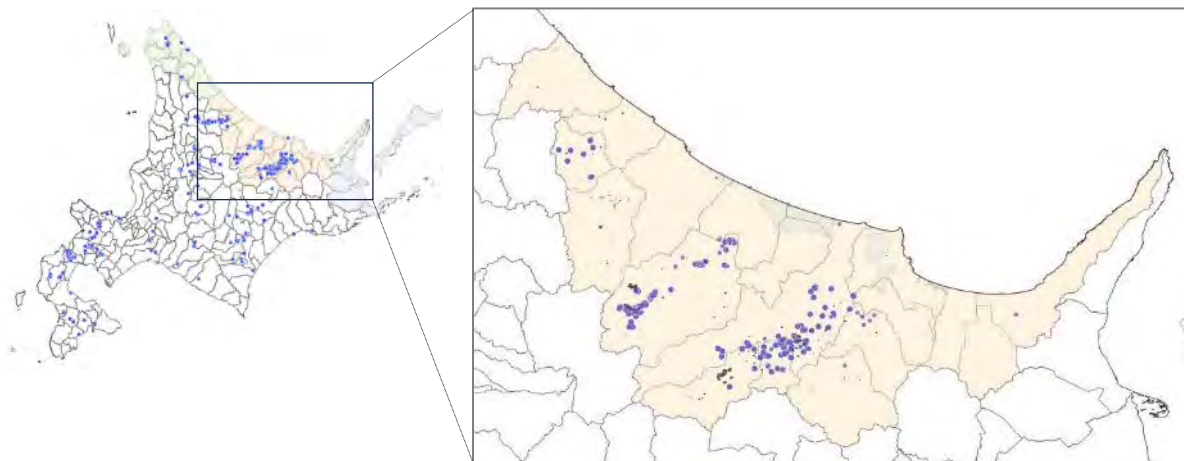
伊茶仁カリカリウス遺跡

(出典：2 点とも文化庁 日本遺産 ポータルサイト)

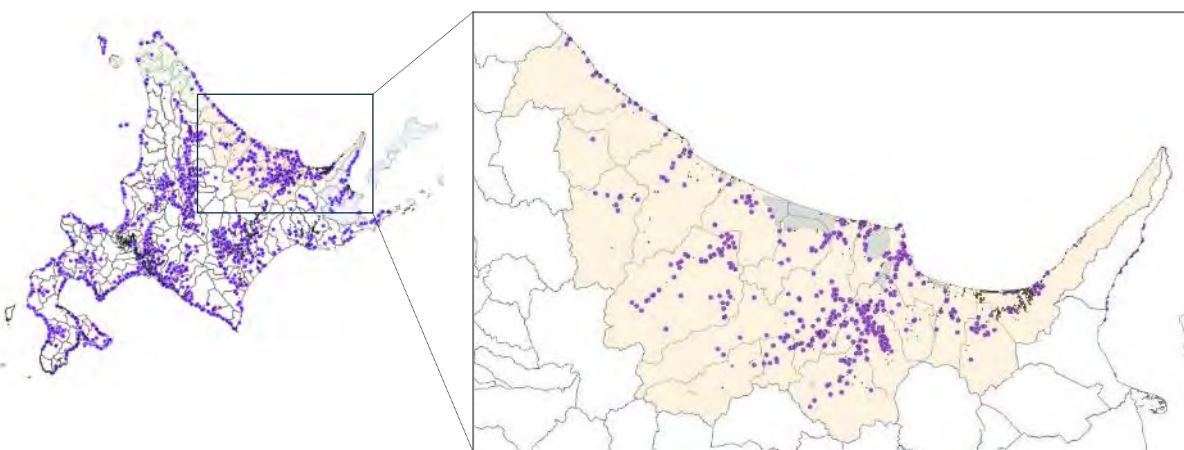
【参考】オホーツク地域の遺跡等の分布調査結果

オホーツク地域の各時代における遺跡の分布を以下に示す。

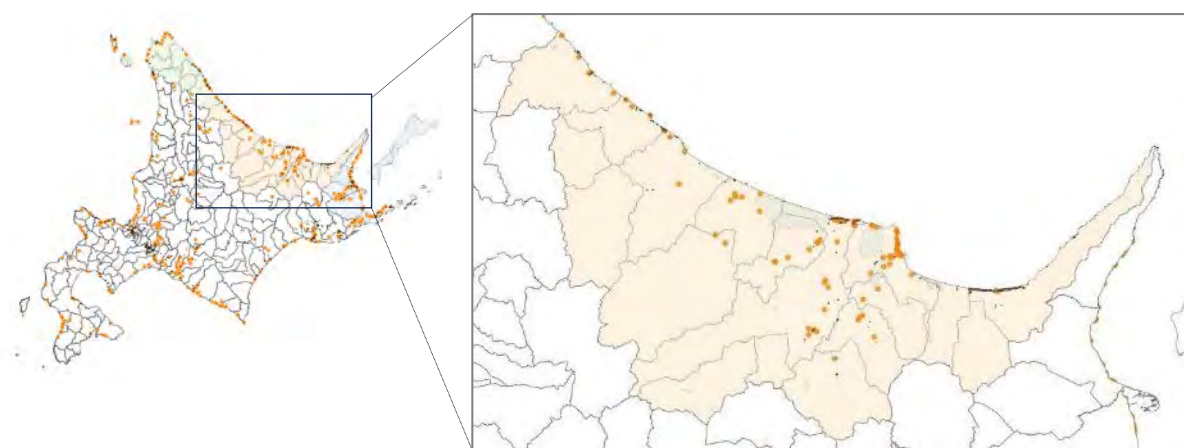
①旧石器文化期



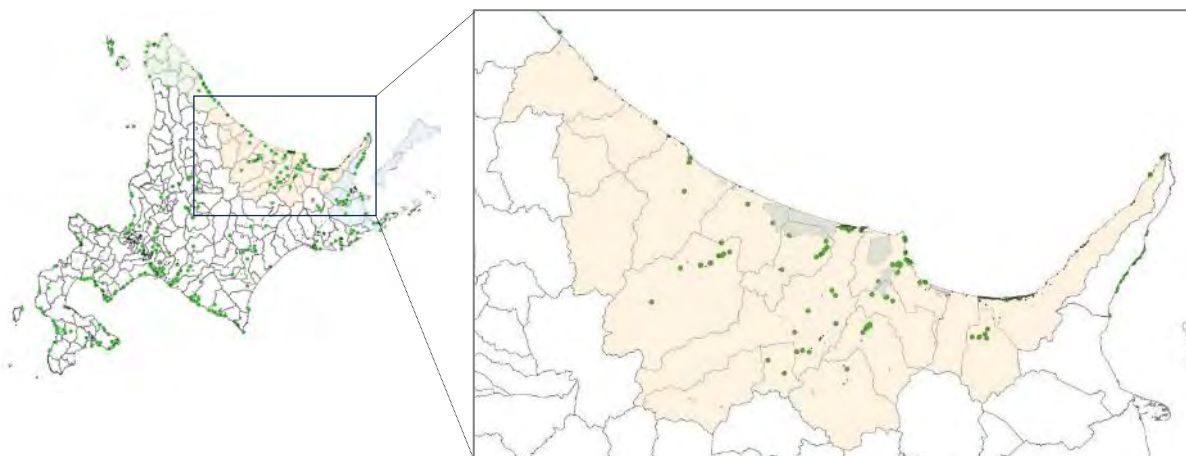
②縄文文化期



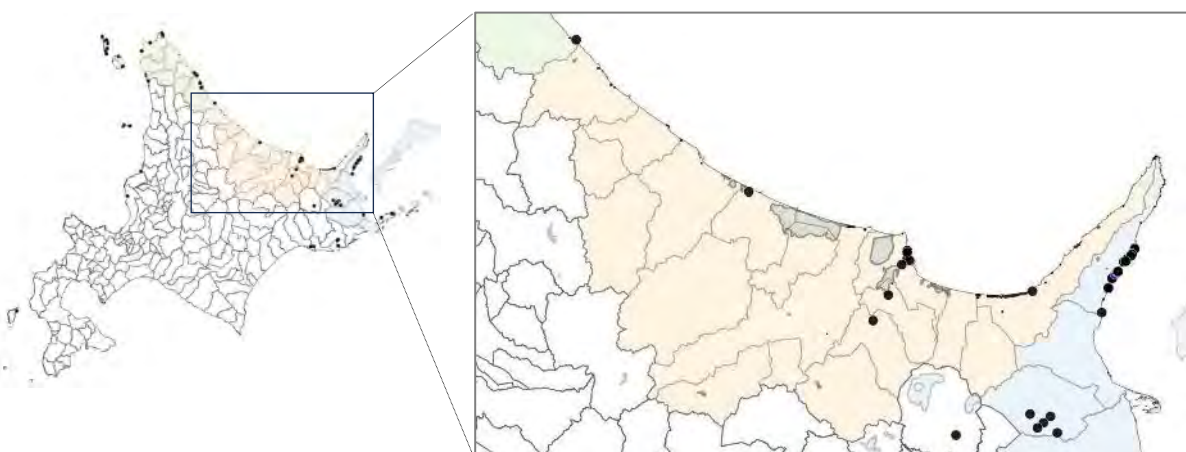
③続縄文文化期



④擦文文化期



⑤オホーツク文化期

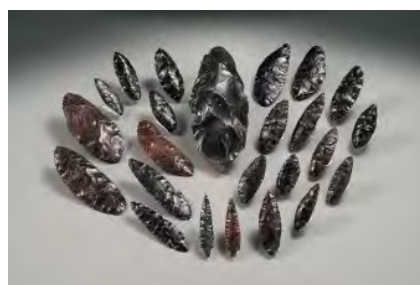


当地域は、オホーツク文化に限らず、各時代におけるそれぞれの文化の遺跡が多数分布している。特に知名度の高いものとしては、遠軽町の旧石器時代の遺跡である「白滝遺跡群」があり、日本最大級の黒曜石原産地となっている。当遺跡群の出土品は平成 23 年に重要文化財として指定された後、令和 5 年には国宝に指定された。

北見市にある「岐阜第二遺跡」でも旧石器時代の黒曜石等が発見されており、オホーツク地域の広い範囲において、様々な時代の文化に触れることができる。



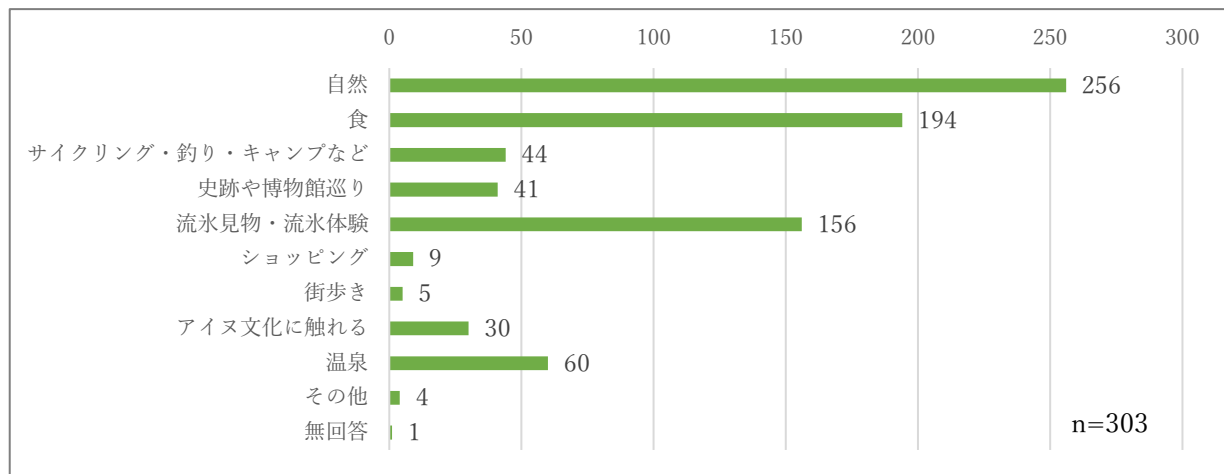
遠軽町の黒曜石の露頭
(出典：えんがる町観光協会)



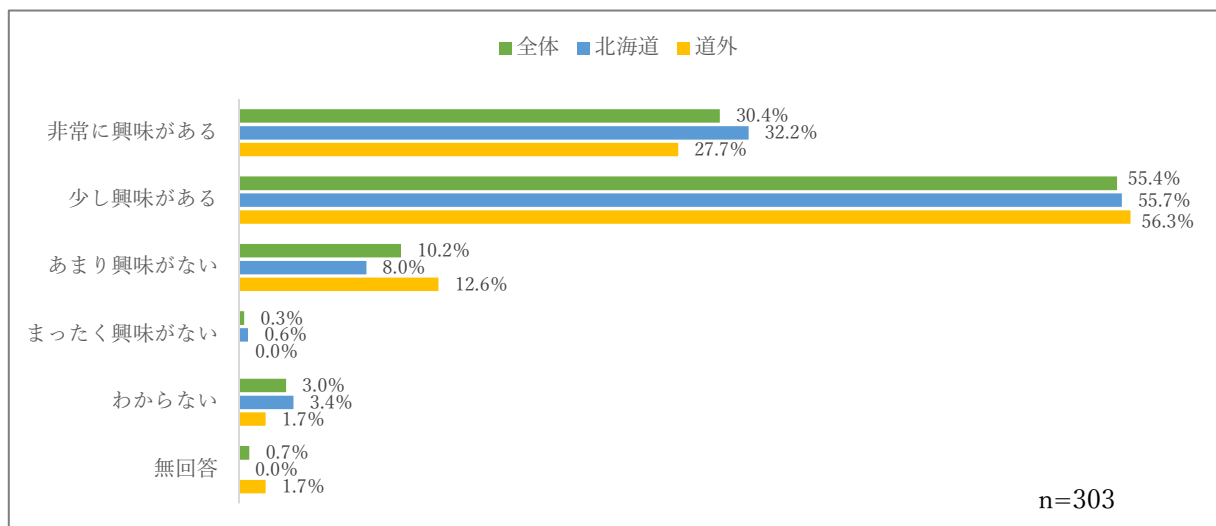
国宝に指定された北海道白滝遺跡群出土品
(出典：北海道歴史・文化ポータルサイト AKARENGA)

【参考】オホーツク地域アンケート調査結果

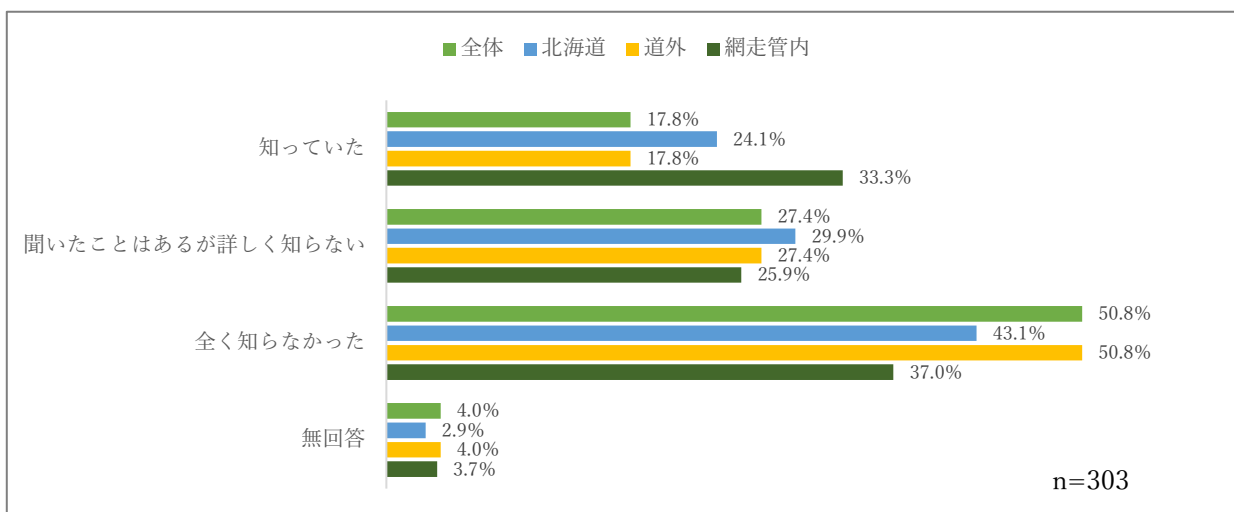
(1) オホーツク観光の魅力



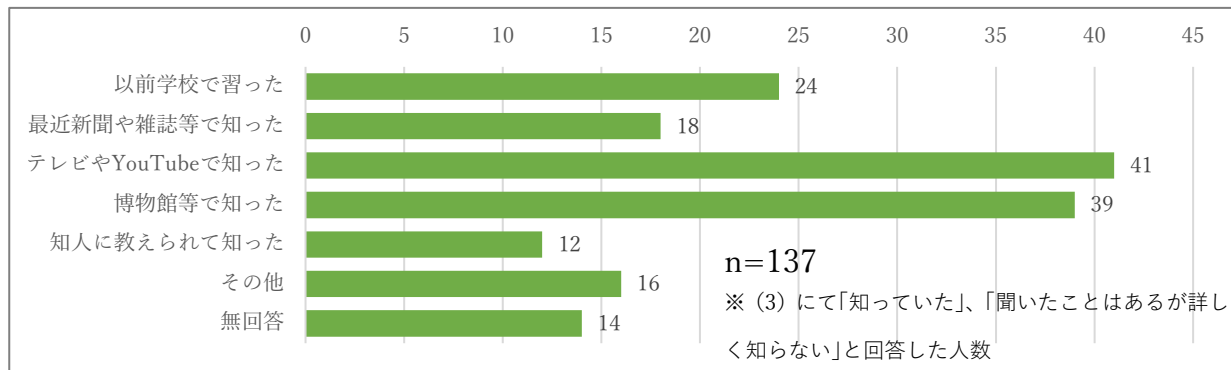
(2) 北海道の歴史についての興味



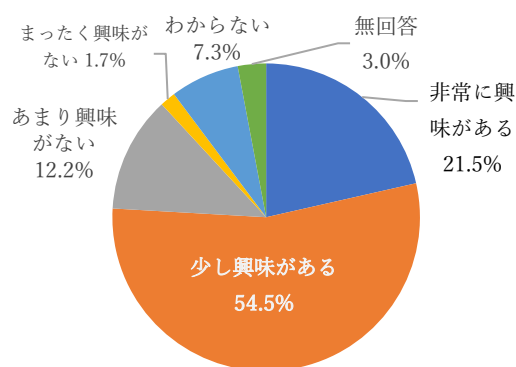
(3) オホーツク文化の認知度



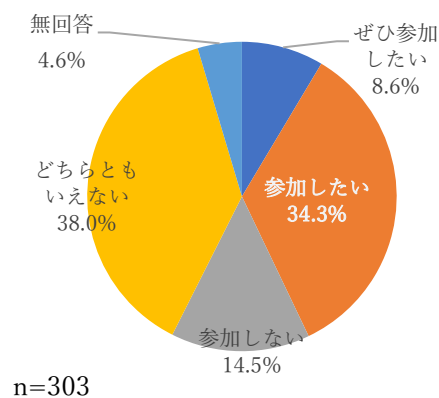
(4) オホーツク文化を何で知ったか



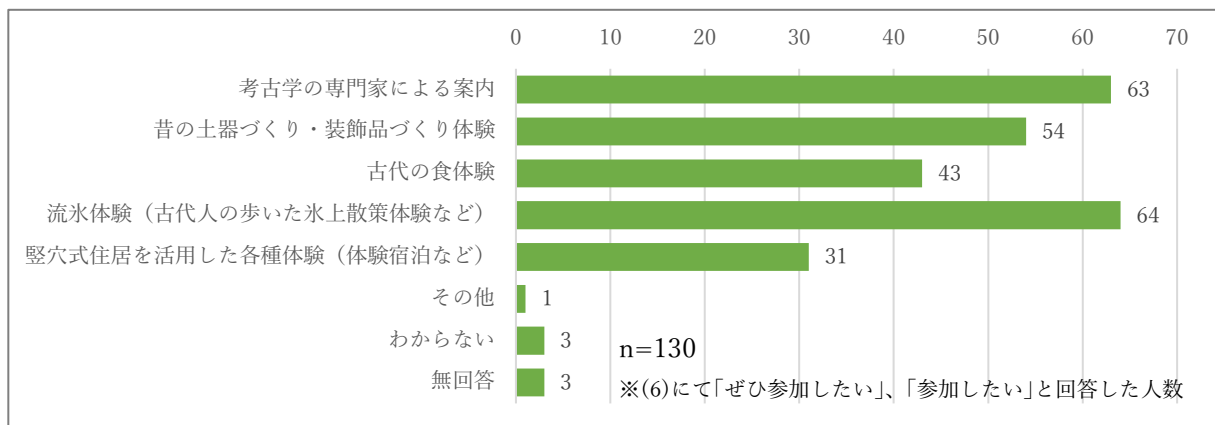
(5) オホーツク遺跡街道への興味



(6) オホーツク遺跡街道ツアーへの参加意向



(7) オホーツク遺跡街道ツアーでの体験希望



【アンケート調査概要】

1. 目的：オホーツクを旅行または移動している日本人観光客（地域住民も含む）のオホーツク文化及び北海道の歴史に関する認知度、関心度、ニーズ等を把握
2. サンプル数：日本人観光客 303 票
3. 調査場所：女満別空港、道の駅オホーツク紋別、道の駅流水街道網走

3. オホーツク遺跡街道について

(1) オホーツク遺跡街道とは

オホーツク文化を始めとした地域の「歴史」「文化」を体感できるエリアであり、多くの史跡・遺跡に加え、その地域に根ざした『食』や『人』を通じて、その地域の風土や自然との関り方、精神性などを面的に体感できる観光エリアとする。

具体的には史跡・遺跡等をつなぐルート形成にとどまらず、オホーツク文化に関連のある各種施設や飲食店、体験コンテンツなども盛り込み、地域の方々と交流することにより、この地域の特性がより感じられるようにすることで、国内他地域との差別化を図り、地域における新たな観光資源となることを目指すものである。

特にオホーツク地域は『流水』の恩恵による豊かな海と野山の自然の恵みに支えられ、何千年も昔から人々が住みつき豊かな暮らしを営んできたと言われており、そうした中で育まれてきた自然と共生する暮らしや芸術性豊かな感性は、今日のオホーツクに住む人々の心の中にも生き続けていると考えられる。

「オホーツク遺跡街道」はこのような先人の自然観や文化的な感性、食文化などを観光振興に活かすことを基本としながら形成を進めることとする。

(2) 来訪者へ伝えたいもの

①オホーツクの人々が長い年月にわたり紡いできた文化と生命のつながりにふれる

→ 各地に数多く点在する史跡・遺跡をつなぎ、それらを訪問し学ぶことで、オホーツク人をはじめとする古代人が紡いできた特徴的な文化や生命のつながりにふれる。

② 流水やオホーツク海が生み出した豊かな海の幸を中心とした食文化にふれる

→ 現在にも通じる流水がもたらす食の恩恵や、この土地ならではの食体系について、地域のことを深く知る地元の人々から学び、この地域ならではの食の特性にふれる。

③ 地域の人々との交流により、オホーツク文化の“今”にふれる

→ オホーツク地域において現在まで育まれてきた様々な文化にふれ、地域の人々と交流することで、過去から引き継がれてきた精神性や、自然との共生といった、この地域の風土を土台とした暮らしぶりにふれる。

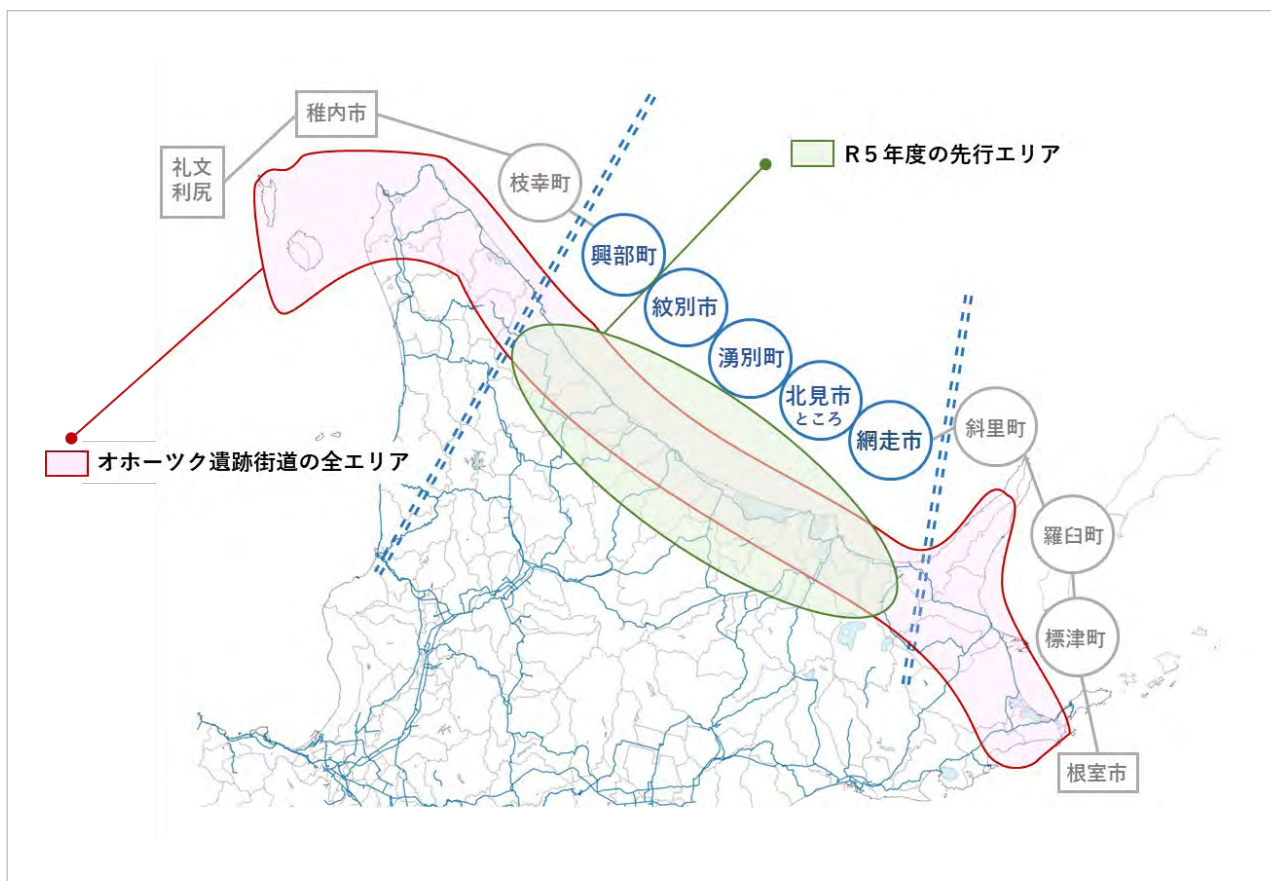
『史跡・遺跡から歴史・文化を学び』『この地域特有の生活を知り』『その上に成り立っている人にふれる』ことを通じて、このエリアならではの魅力を発信していく。

(3) オホーツク遺跡街道の範囲について

オホーツク文化遺跡は、オホーツク海沿岸の北は利尻島・礼文島及び稚内市から南は根室市までと広く分布していることから、基本的にはオホーツク海沿岸全域をオホーツク遺跡街道の対象エリアと設定し、各拠点エリアの充実、長距離トレイルの計画など、長期的な視点からこの街道の実現を目指すこととする。ただしエリアが広範囲に及ぶため、今年度は、興部町から網走市までの範囲において先行して検討することとした。

なお次年度以降は、関係者同士で協議を行いながら、オホーツク遺跡街道や関わる地域の検討範囲を適宜拡大していくこととする。

また、オホーツク遺跡街道は、オホーツク文化を中心とした観光資源で構成するが、このエリアには、オホーツク文化のほか旧石器・縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡も多く存在しているため、これら各文化期の資源も積極的に取り込み、より奥の深い魅力的なエリア形成を目指すものとする。



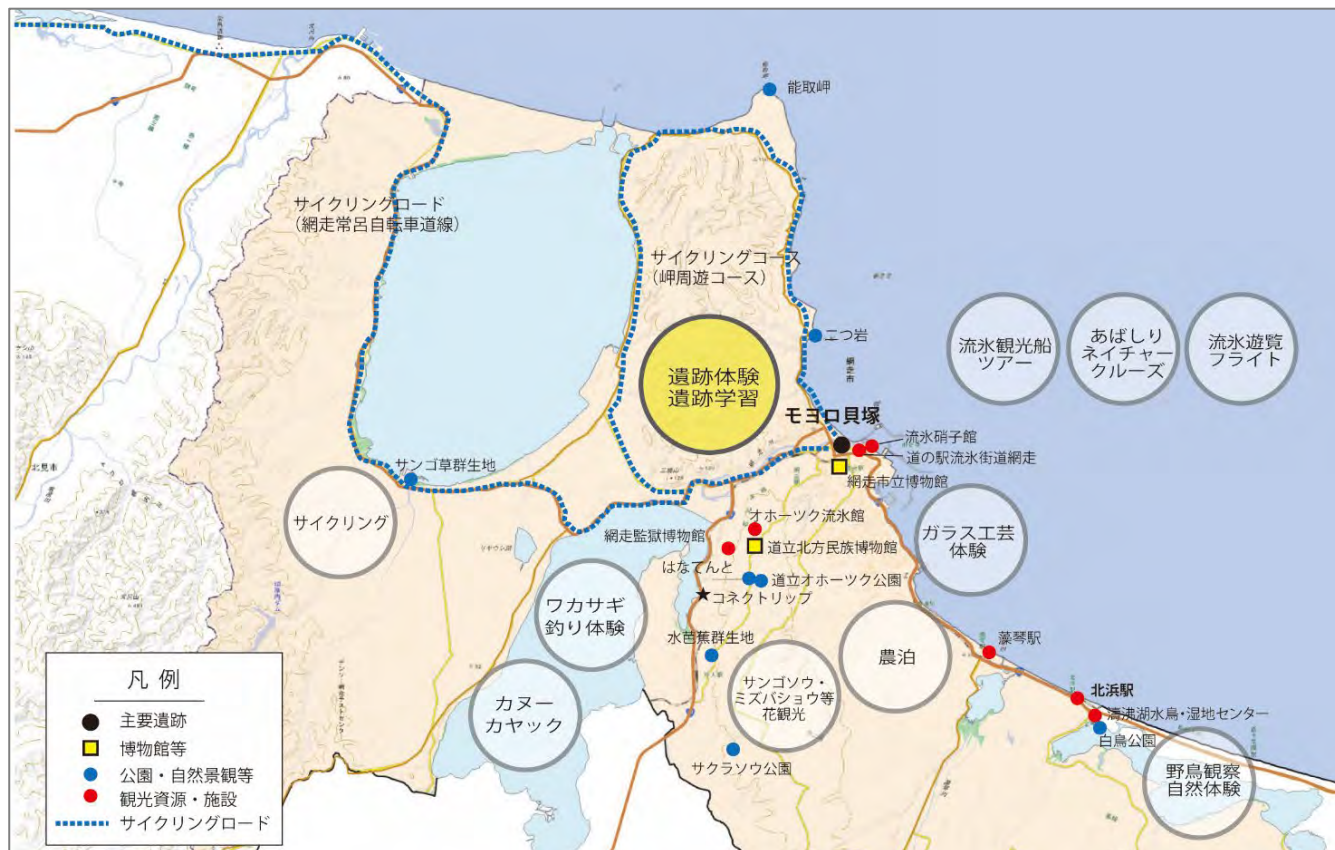
(4) 拠点エリアの設定

上述のとおり、当面はオホーツク遺跡街道の範囲を興部～網走間とし、中核となる４市町（網走市、北見市、紋別市、興部町）を拠点エリアとする。今後、拠点エリアの関係者を中心にオホーツク遺跡街道の形成に向けた協議を行いながら、各市町におけるハード・ソフト整備事業の内容についても協議し、継続的な取組を実施していくこととする。

4. 拠点ごとの現状と今後の目標

(1) 網走地区

<既存の観光資源>



現在ある主な体験メニュー
遺跡体験・遺跡学習 (史跡最寄貝塚、網走市立博物館、北方民族博物館)
ワカサギ釣り (網走湖)
カヌー・カヤック (常呂湖、網走湖)
野鳥観察、自然体験 (清流湖)
流水観光船ツアー (網走港)
ガラス工芸体験 (流水硝子館)
流水遊覧フライト (女満別空港発着)
サイクリング (網走常呂自転車道線ほか)
サンゴソウ、ミズバショウ等花観光 (能取湖、網走湖)
農泊 (ファームイン・アニマの里ほか)
あばしりネイチャークルーズ 4月初～「とっかりツアー」、 4月下旬～10月「クジラウォッチング」

今後の目標 <地域からの声>
今後、開発或いは磨き上げていく素材もオホーツク文化のストーリーコンセプトに沿ったものでなければ新しい魅力を生み出せないとする。
遺跡街道沿い各地のオホーツク文化を案内できる専門ガイドツアー、プログラムや体験アクティビティもコンセプトに照らして作り込んでいく必要があると考えられる。
遺跡を管理監督できる人材不足の解消 (少ない専門職員・遺跡の環境整備などの実働が可能な人材の高齢化)
専門ガイドの育成は必要 (全箇所共通)
整備と言うよりは「認知度」を上げる取組の検討が必要ではと感じる。例えば「親子」とか、「団体ツアー客」などターゲットを絞った体験イベントの検討など (全箇所共通)
調査を通じて得られた提案
関連市町村との連携、特に常呂地区との連携強化による遺跡街道のルート形成と多様なアクティビティの開発を推進する。
変化に富んだ湖沼群など網走の豊かな自然を活用した自然体験型観光の推進 (カヌー、カヤック、フィッシング等) に歴史文化要素を加えたアドベンチャートラベルを推進する。
海からオホーツク地域を見るオホーツククルーズを活用する。
モヨロ鍋の復活、オホーツク文化をテーマにした新メニューを開発する

(2) 北見地区

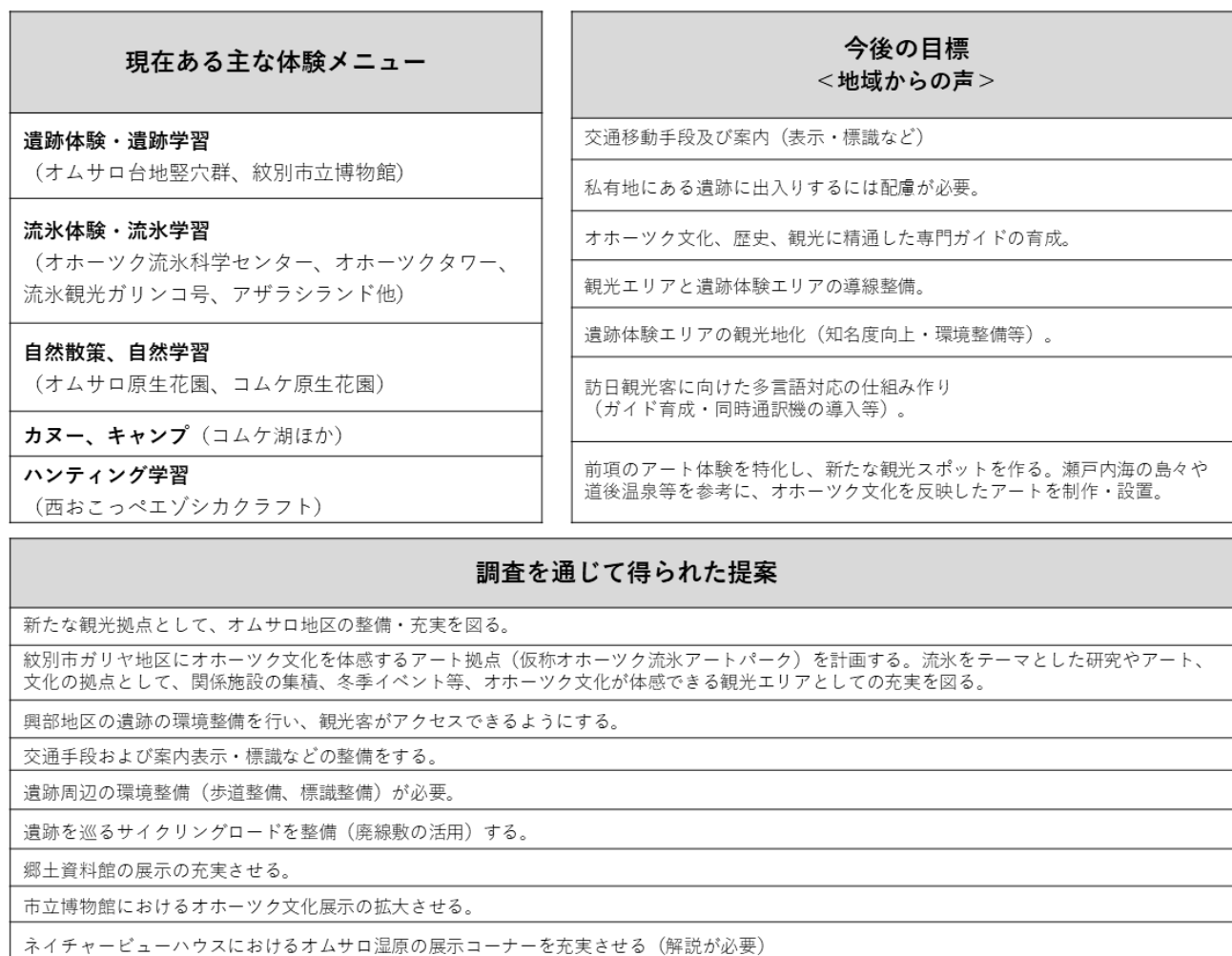
<既存の観光資源>



現在ある主な体験メニュー
遺跡体験・遺跡学習 (常呂遺跡の森、ところ遺跡の館、常呂遺跡等)
土器づくり体験 (ところ遺跡の森)
陶芸体験 (手工芸の館)
自然学習・自然体験 (ワッカ原生花園、ワッカネイチャーセンター)
サイクリング (網走常呂自転車道線ほか)
カーリング体験 (北見市常呂町カーリングホール)

今後の目標 <地域からの声>
「オホーツク文化」を軸とするならば、カーリング体験やサイクリング体験は適切な素材とは感じない。但し、「体験」ではなく「移動手段」としてのサイクリングは有効であると考え。
各施設における観光客の受け入れ態勢（文化施設側の受入体制が整っている必要があることから、教育委員会との連携が必要）
調査を通じて得られた提案
学術的に注目されている常呂遺跡の観光面でのPRの促進を図りながら、遺跡をテーマとした専門ガイドによるガイドツアーなど、多様な旅行需要に対応できる魅力的な観光コンテンツを開発する。
網走と北見の2市を結ぶサイクリングロードを一つの軸として、2市をつなぐオホーツク文化遺跡体感サイクリングルートの開発を行う。
ホタテ、カキ等の豊かな海の幸を活用した、特徴的なオホーツク料理を開発する。
遺跡エリア全体を歩いて楽しめるフットパスの整備する。

＜既存の観光資源＞



参考ルート例

◆モデルルートの例 〈ケース①〉

<3つの地域区分による時代別ストーリーづくり>

利尻島・礼文島・稚内市から根室市までの地域を、オホーツク文化の南下に沿って、時期別に3つのストーリーに区分し、各地域の遺跡・博物館・資料館で連携し、オホーツク文化の始まりから終わりまでのストーリーを伝えるルート形成を行う。

(1)「オホーツク文化の源流を辿る～日本最北の離島をめぐる～」

【訪問地】：利尻島・礼文島・稚内市（利尻島・礼文島ともに専門の学芸員がいるので対応可能）

【テーマ】：オホーツク文化の渡来と形成（初期～前期）

【食】：ウニ・昆布・ホッケ・タコ・なまこ他

【主な関連施設】：●利尻島…亦稚貝塚

●礼文島…香深井遺跡、礼文町郷土資料館

●稚内市…オンコロマナイ遺跡、稚内市北方記念館

<礼文島・利尻島から稚内市>



(2)「花開くオホーツク文化～オホーツク街道を辿る～」

【訪問地】：枝幸町・紋別市・湧別町・北見市常呂町・網走市

【テーマ】：オホーツク文化の展開（前期～中期）

【食】：サケ・毛ガニ・ホタテ他

【主な関連施設】：●枝幸町…目梨泊遺跡、オホーツクミュージアムえさし

●紋別市…オムサロ台地竪穴群、紋別市立博物館

●湧別町…シブノツナイ竪穴住居跡群、湧別町郷土館
（川西オホーツク遺跡）

●北見市…ところ遺跡の館、ところ遺跡の森、栄浦第二遺跡（常呂遺跡竪穴群）

●網走市…モヨロ貝塚、モヨロ貝塚、貝塚館・網走市立郷土博物館、天都山、
道立北方民族博物館

＜枝幸町から網走市＞



(3) 「オホーツク文化の終焉を辿る」

【訪問地】：斜里町・羅臼町・標津町・根室市

【テーマ】：オホーツク文化の終焉－オホーツク人の生き残り戦略（後期～変容期）

【食】：鮭(日本遺産)・多種多様な魚介類・海底に大挙集結し踊るホタテ貝・花咲ガニ・
羅昆布・ホッカイシマエビ(打瀬船で漁獲)・アザラシ・ヒグマ

【主な関連施設】：●斜里町…斜里町立博物館、チャシコツ岬上遺跡

- 羅臼町…松法川北岸遺跡
- 標津町…標津遺跡群
- 根室市…トーサムボロ竪穴群、オンネモト竪穴群、弁天島貝塚竪穴群

＜斜里町から根室市＞



◆モデルルートの例 <ケース②>

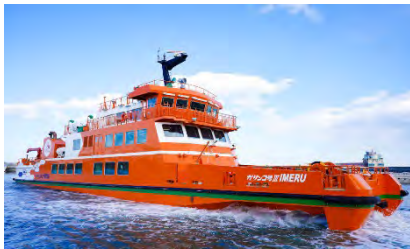
「水の道」 <オホーツク文化人と密接につながる海（オホーツク海）> 海、川、湖を結ぶ

海獣狩猟民族であるオホーツク文化人が生活をする上で中心となった、豊かな自然に恵まれた『オホーツク海』は、生活に欠かせない衣食住の基盤となっていた。現代にも受け継がれている海の恵みと、その恩恵を受けて暮らしてきた人々の足跡を辿り、海・川・湖から、オホーツク文化人の生活を学び、オホーツク文化人の暮らしたこの土地を探索する。

(1) 海の道

このエリアでの生活に関わりの深いオホーツク海において、冬期以外におけるガリンコ号・おーろら号での周遊や、各種アクティビティを活用し足跡を辿る

【訪問地】：ガリンコ号…紋別市・興部町・枝幸町
おーろら号…網走市・斜里町・知床半島



(出典：オホーツク・ガリンコタワー株式会社 HP)



(出典：網走観光協会 HP)

(2) 川の道

サロマ湖をはじめとした湖や川において、カヌー・カヤックなどによる周遊や、各種アクティビティを活用し足跡を辿る

【訪問地①】：紋別市・湧別町

【場所】：渚滑川、湧別川から、オホーツク海へ

【訪問地②】：北見市・網走市

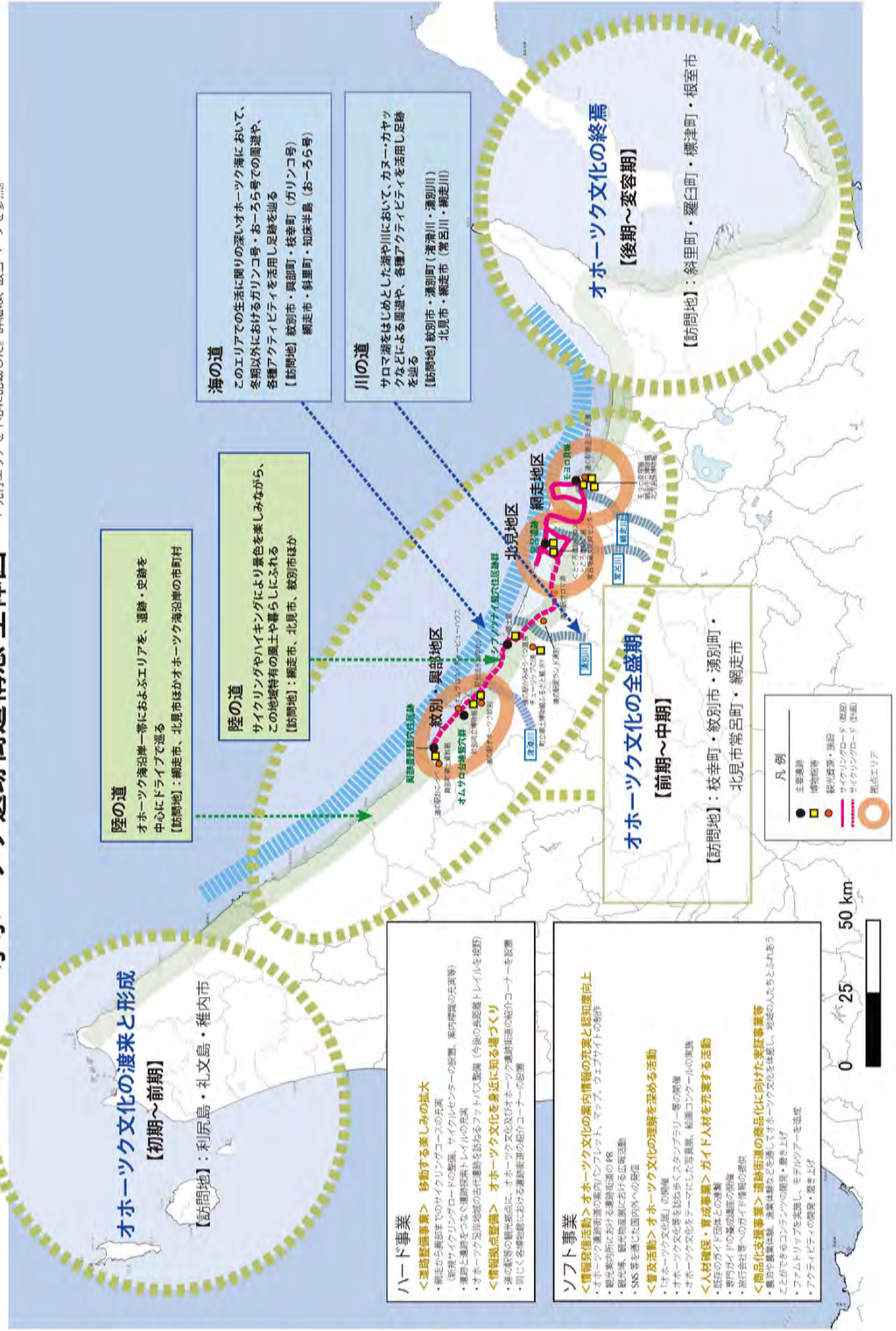
【場所】：常呂川、網走川から、オホーツク海へ
多くの遺跡が残るサロマ湖を中心に
能取湖、網走湖などを周遊する



(出典：2点とも網走観光協会 古代縄文ツアーHP)

オホーツク遺跡街道構想 全体図

* 先行エリアを中心に記載した。詳細は、該当ページを参照。



◆モデルルートの例 <ケース③>商品化に向けたツアーコース例

「和6年度 将来にわたって旅行者を惹きつける地域・日本の新たなレガシー形成事業」成果より

「オホーツク歴史紀行」 一流氷の海と古代文化

(1)「オホーツク歴史紀行（夏編）—流氷の海と古代文化—」

① ツアー趣旨

遺跡や博物館を巡り、オホーツク地域特有の文化であるオホーツク文化をはじめとした文化・歴史を学ぶことに加え、オホーツク文化の特徴である食を堪能する。また、地域住民との交流を通して、当地域における現在の暮らしや、地域で引き継がれてきた精神性に触れる。

②コースの特徴

- ・サロマ湖周辺で、遺跡巡りとサイクリングを同時に楽しむことができる。
- ・土器作り体験やファーム見学において、地域住民と交流し、地域の生活ぶりや魅力を知ることができる。
- ・未利用魚ランチ・クジラ料理・モヨロ鍋など、古くから当地域の生活に欠かせないオホーツク海ならではの海鮮が楽しめる。
- ・最終日は、2つの空港を選択できるオプションコースを用意

③主なターゲット

- ・首都圏、関西圏の歴史に関心の高い、比較的時間と金銭的な余裕のある層



「オホーツク歴史紀行（夏編）―流氷の海と古代文化」 ツアー行程

1 日目		網走エリア:オホーツク文化の世界へ	
10:00	女満別空港集合・ツアーバス乗車		
11:00	北方民族博物館見学（北方民族の理解） オホーツク流氷館見学（－20 度体験と知床の遠望）		
13:00	（昼食）市内寿司店		
14:00	モヨロ貝塚館（遺跡見学）		
15:00	同上（土器づくり体験）		
17:00	ホテル到着 （夕食）市内居酒屋（クジラ料理またはモヨロ鍋）		
2 日目		常呂・サロマ湖エリア:サロマの自然と遺跡探訪	
8:30	ホテル出発・常呂エリアへ移動		
9:00	能取岬（雄大なオホーツクの景観を眺望）		
10:00	ところ遺跡の館・遺跡の森（オホーツク文化の出土品等見学）		
11:30	（昼食）常呂市街地レストラン（自由にメニュー選択）		
12:30	ワッカネイチャーセンター（サロマ湖遺跡巡りサイクリング）		
15:00	江面ファーム見学（ティータイム）		
16:00	遠軽埋蔵文化財センター見学		
18:00	夕食/宿泊 サロマ湖鶴雅リゾート（海鮮料理等） ＊ホテル内での講話（オホーツクの昔話）		
3 日目		紋別・興部エリア:流氷と歴史探訪	
9:30	湧別町郷土館（シブノツナイ遺跡の埋蔵品など見学）		
10:30	紋別市立博物館（紋別の歴史について学芸員が解説）		
11:30	オムサロ遺跡公園見学		
12:00	オホーツク文化遺跡「沙留岬」よりオホーツク海を眺望		
12:30	昼食 沙留漁港（未利用魚を利用したオリジナルランチ）		
13:30	オホーツク流氷科学センター見学		
14:00	とっかりセンター見学		
15:30	鴻之舞鉱山跡見学		
18:00	夕食/宿泊 紋別セントラルホテル（紋別カニづくしディナー）		
4 日目			
8:30	ホテル出発		
9:00	（体験オプション） ①ガリンコ号による近海クルーズ（紋別市） ②エゾシカハンティングツアー（西興部村） ③沙留岬遺跡発掘体験（興部町）		
12:30	紋別空港（東京へ）		

(2)「オホーツク歴史紀行（冬編）—流氷の海と古代文化」

① ツアー趣旨

遺跡や博物館を巡り、オホーツク地域特有の文化であるオホーツク文化をはじめとした文化・歴史を学ぶことに加え、オホーツク文化の特徴である食を堪能する。また、地域住民との交流を通して、当地域における現在の暮らしや、地域で引き継がれてきた精神性に触れる。

②コースの特徴

- ・流水クルーズで、オホーツク文化人の生活の舞台であったオホーツク海及び流水を満喫できる。
- ・ワカサギ釣りやハンティングツアーで、地域住民と交流し、自然と共生する精神性に触れることができる。
- ・貝汁・モヨロ鍋など、オホーツク文化と関わりの深い料理が楽しめる。

③主なターゲット

- ・首都圏、関西圏の歴史に関心の高い、比較的時間と金銭的な余裕のある層

モデルコース全体図



「オホーツク歴史紀行（冬編）—流氷の海と古代文化」 ツアー行程

1 日目		網走エリア：流氷とオホーツク文化の世界へ	
10:00	女満別空港集合・ツアーバス乗車	 	
11:00	北方民族博物館（オホーツク文化等の歴史と遺跡紹介）		
12:00	（昼食）市内寿司店		
13:30	流氷砕氷船「おーろら」乗船（流氷クルーズ）		
16:00	・16:00 モヨロ貝塚館（遺跡見学・モヨロ貝汁試食）		
18:00	ホテル到着（ドリーミーイン網走） （夕食）市内居酒屋（モヨロ鍋ほか海鮮ディナー）		
2 日目		常呂・サロマ湖エリア：流氷と古代遺跡探訪	
8:30	ホテル出発・常呂エリアへ移動	 	
9:00	能取岬（雄大な流氷風景を見学）		
10:00	ところ遺跡の館・埋蔵文化財センター（出土品等見学）		
11:30	（昼食）常呂市街地レストラン（自由にメニュー選択）		
14:00	遠軽町埋蔵文化財センター見学		
15:30	遠軽町家庭学校見学		
18:00	夕食/宿泊 サロマ湖鶴雅リゾート（海鮮料理等）		
3 日目		紋別・興部エリア：流氷と歴史探訪	
8:30	ホテル出発・紋別へ移動	  	
9:30	湧別町郷土館（シブノツナイ遺跡の埋蔵品など見学）		
10:30	紋別市立博物館（紋別の歴史について学芸員の説明を聞く）		
12:00	昼食 ノースプレインファーム（ランチ&スイーツ）		
13:30	北海道立オホーツク流氷科学センター（流氷体験・クリオネ観察）		
14:30	ガリンコ号による流氷クルーズ		
15:30	モニュメント「カニの爪」付近を散策（時期が合えば紋別流氷フェスティバル見学）		
17:00	夕食/宿泊 紋別セントラルホテル（紋別カニづくしディナー）		
4 日目		紋別 →女満別空港	
8:30	ホテル出発		
9:00	（体験オプション） ①流氷ウォーク ②ワカサギ釣り ③エゾシカハンティングツアー（西興部村） ④チーズづくり体験（興部町）		
12:30	紋別空港（東京・札幌へ）		

5. エリア共通の整備計画案

(1) 主なハード事業

<道路整備事業> 移動する楽しみの拡大

- ・ 網走から興部までのサイクリングコースの充実
(新規サイクリングロードの整備、サイクルセンターの設置、案内標識の充実等)
- ・ 遺跡と遺跡をつなぐ遺跡探索トレイルの充実
- ・ オホーツク沿岸地域の古代遺跡を訪ねるフットパス整備 (今後の長距離トレイルを視野)

<情報拠点整備> オホーツク文化を身近に知る場づくり

- ・ 道の駅等の観光拠点に、オホーツク文化及びオホーツク遺跡街道の紹介コーナーを設置
- ・ 同じく各博物館における遺跡街道の紹介コーナーの設置

(2) 主なソフト事業

<情報発信活動> オホーツク文化の案内情報の充実や認知度向上

- ・ オホーツク遺跡街道の案内パンフレット、マップ、ウェブサイトの制作
- ・ 観光案内所における遺跡街道のPR
- ・ 観光博、観光物産展における広報活動
- ・ SNS等を通じた国内外への発信

<普及活動> オホーツク文化の理解を深める活動

- ・ 「オホーツク文化展」の開催
- ・ オホーツク文化等を訪ね歩くスタンプラリー等の開催
- ・ オホーツク文化をテーマにした写真展、絵画コンクールの実施
- ・ 祭りやイベントでの広報ブースの設置

<人材確保・育成事業> ガイド人材を充実する活動

- ・ 既存のガイド団体との連携
- ・ 専門ガイドの養成講座の開催
- ・ 旅行会社等へのガイド情報の提供

<商品化支援事業> 遺跡街道の商品化に向けた実証事業等

- ・ 農泊や農業体験、漁業体験などを通してオホーツク文化を体感し、地域の人々にふれあう
事ができるコンテンツの開発・磨き上げ
- ・ ファムトリップを実施し、モデルツアーを造成
- ・ アクティビティの開発・磨き上げ

(3) ロードマップ

上記のハード及びソフトの取組みについて、今後の事業スケジュールを以下のロードマップに整理している。10年後を目標年として、前期と後期とにわけて、その実現を目指していくものとする。

オホーツク遺跡街道構想ロードマップ 10年間の事業計画

実施事業	行動目標	アクション	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16
			前期計画					後期計画				
1.行動計画作成 (アクションプラン)	ネットワークが当面実施する行動計画の作成 ・以下の事業を網羅した具体的な行動計画を作成 (5年間を前期計画、5～10年間を後期計画として事業を推進)		オホーツク遺跡街道の推進体制構 及び 観光コンテンツの発掘、開発期					オホーツク遺跡街道としての観光 コンテンツの磨き上げ期				
2.普及・啓発活動	・観光客のオホーツク文化 の認知度向上 ・この取り組みに対する地 元の理解促進	・ガイドパンフレット等 の作成	多様な情報ツールを駆使したオホーツク観光 の発信 オホーツク遺跡街道が、オホーツク観光に欠か せない観光コンテンツに。									
		・ウェブサイト・SNSの 開設										
		・関連イベントの実施										
3.遺跡街道ツアーの 商品化と定着	・モデル観光ルートの実証 調査 ・旅行会社との協働によ る旅行商品の開発・販売	・モデルツアーの企 画・実施	オホーツク文化の認知度向上 オホーツク遺跡街道ツアーの定着									
		・民間事業者が企画する 遺跡街道ツアーの協力										
		・その他旅行会社等への ツアー誘致、広報活動										
4.ガイド人材の育成	・旅行商品の充実に向けて、 地元ガイドを養成する仕組 みをつくる	ガイド人材の発掘調査	継続事業として毎年実施					ガイド人材の活躍				
		ガイド育成セミナー開 催										
		ガイド人材登録制度の 検討、制度設計										
5.遺跡街道に係る 情報拠点等の整備	・主要情報拠点の充実に向 けた各施設への働きかけ ・観光ルート上における新 たな観光コンテンツの発掘	・各情報拠点施設の実 現化に向けた協議	関係機関と協議					多様な情報拠点、スポットの実現				
		・発掘調査(その一部 を体験活動として行う										
		・食文化開発										
6.地域が応援する仕 組みづくり	・オホーツク管内の観光事 業者が遺跡街道構想に参 画する仕組みづくり	・上記PRイベントへの 協賛要請(遺跡街道ス タンプラリーの実施等	オホーツク文化等の伝統を引き継 ぐ料理開発					その一部がツアーメニューとして定着				
		・ネットワーキング構成員の 拡大・組織的広がり										

このロードマップは、令和6年度に関係者による会議、ワークショップ等を
通じて提案された取組について、年次別に整理したものである。

6. 事業の推進計画（管理運営計画）

（１）事業推進体制の構築

オホーツク遺跡街道の推進に向けて、オホーツク遺跡街道推進ネットワークが令和６年４月に立ち上がり、活動を行っている。

この組織は、令和５年度に観光庁のレガシー形成事業を契機に設立した「オホーツク遺跡街道推進連会（準備会）」がその母体である。オホーツク文化をはじめとする地域の遺跡や観光資源に関する情報共有と民間団体を含む広範なネットワーク形成を目的としており、現在、18の機関・団体が参加している。

令和６年度の活動としては、国が実施するレガシー形成事業の連絡・支援組織として会議の開催やワークショップ、現地視察調査への協力を行っており、今後も構成員が実施する関連事業を積極的に支援していく方針である。

令和７年度に向けては、（一社）オホーツク・テロワールが、観光庁の「レガシー形成事業」への継続応募と、「地域観光魅力向上事業」への新規応募を検討しており、そうした地域の活動を支援していくものとする。

なお、令和７年度から、オホーツク遺跡街道推進ネットワークの事務局は、公益財団法人オホーツク生活文化振興財団（北海道立オホーツク流水科学センターの指定管理者）となっている。

（２）オホーツク遺跡街道推進ネットワークの今後の活動について

当ネットワークの活動内容は、オホーツク文化に関する情報共有を基本とするが、ロードマップに示したオホーツク遺跡街道実現に向けての各種事業の側面的な支援を行っていく。

オホーツク遺跡街道推進ネットワーク 規約 (令和7年4月1日改訂予定)

(名称)

第1条 本会は、オホーツク遺跡街道推進ネットワークと称する。

(目的)

第2条 本会は、50年後・100年後のオホーツク地域の価値を高める観光資源として、オホーツク文化をはじめとする各地の遺跡等をつなぐ新たな観光ルートを含む面的な観光エリア「オホーツク遺跡街道」の形成を図るため、その実現に向けた協議、及びそれに基づく必要な事業を行うことを目的とする。

(取組事項)

第3条 本会は、オホーツク地域において次の取り組みを行う。

- (1) オホーツク文化の情報共有、情報発信
- (2) オホーツク遺跡街道実現に向けた協議
- (3) その他、本会の目的達成に必要な取り組み

(構成)

第4条 本会の構成員は、本事業に賛同した行政機関、民間団体・企業、個人とする。

(役員)

第5条 本会に次の役員を置く。

会長 1名

- 2 会長は、会員の中から互選する。
- 3 会長の任期は2年間とする。但し、再任を妨げない。
- 4 会長は、本会を代表し、会務を統括する。

(会議の運営)

第6条 本会は会長が招集し運営する。

- 2 会議の開催は年1回以上とする。
- 3 会長は、必要に応じて構成員以外の者を会議に招き、意見を聞くことができる。

(事務局)

第7条 本会の事務局は、公益財団法人オホーツク生活文化振興財団に置く。

附 則

この規約は、令和6年4月1日から施行する。

附 則

この規約は、令和7年4月1日から施行する。

オホーツク遺跡街道推ネットワーク構成員

(令和7年年2月末現)

名 称	分 類
網走市	市町村
北見市	〃
紋別市	〃
興部町	〃
網走市教育委員会	〃
北見市教育委員会	〃
紋別市教育委員会	〃
興部町教育委員会	〃
一般社団法人網走市観光協会	市町村観光協会等
一般社団法人北見市観光協会	〃
株式会社紋別観光振興公社	〃
一般社団法人おこっぺ町観光協会	〃
一般社団法人オホーツク・テロワール	民間団体
(公財)オホーツク生活文化振興財団	〃
オホーツク観光連盟	〃
北海道オホーツク総合振興局	北海道
北海道教育庁オホーツク教育局	〃
北海道運輸局	国
北海道開発局網走開発建設部	〃

【参考】オホーツク遺跡街道整備に対する専門家の提言等

考古学、観光プロモーション等に知見のある専門家に現地視察に同行いただき、以下のようなご意見を頂いた。

●魅力ある交通手段の開発

遺跡街道を移動する交通手段として自転車は有望。かつて、雄武町から斜里町までの 212km を一泊二日で走破する「オホーツクサイクリング」が開催されていた経験を活かし、一部自転車での移動区間を設けることは有効である。

また、未完に終わった旧国鉄のオホーツク本線沿いの鉄路・駅舎跡を辿る部分を組み込んだり、網走駅～知床斜里駅間のみ存在する鉄路を活用するなど、実現可能な要素が見られる。

●オホーツク遺跡街道の出発点は礼文島

オホーツク遺跡街道は礼文島からスタートするのが良い。礼文島から標津町ポー川まで約 500 キロの旅。最北の礼文島から始まり、稚内～オホーツク沿岸へ南下するほど、遺跡群の数も増えていき、寒さから逃れ、食の豊かな網走、標津へという足取りも想像を掻き立てる。

●ボランティアガイドではなく専門ガイドを起用

来訪者の満足度を高めていくためには、ボランティアガイド(現実には、第一線を退いた高齢者が多い)では限界、多方面の知識と高度な専門性のある専門ガイドが必要。

●文化・歴史はアドベンチャートラベルに欠かせない要素

アドベンチャートラベルには欠かせない文化・歴史の要素がこのオホーツク文化にはある。途中、世界自然遺産である知床にも遺跡が見られることから、アクティビティと食を含めて歴史を辿るロングストーリーが作られ、欧米豪をターゲットとした、1 か月ぐらいの滞在プランも可能。

●滞在型観光地整備の課題

オホーツク遺跡街道の醍醐味である、オホーツク文化の時間的・地域的展開を、各種体験を含めた長期滞在型観光で味わい尽くしてもらう。そのためにはコアとなる史跡や博物館等の協力が不可欠。多言語での展示解説や遺跡の発掘・カヌー・土器づくりなどの体験メニューが成否を分ける。

課題は長期滞在できる宿泊施設の充実。特にインバウンド対応型の宿泊施設はオホーツク中部以北は少なく、その整備促進が課題である。

●オホーツク文化を生かした新たなまちづくりに向けて

2022 年 4 月から文化財保護法が改正され、市町村が独自の「文化財保存活用地域計画」を策定することが求められている。これは、地域の方々が改めて身近な自然や歴史に目を向けて、それらを一体的に把握・活用することで、これからのまちづくりに活かそうというもの。

この機会を捉えて、地域主導で、「場所」「もの」「人」を有機的に関連付けた立体的なオホーツク文化を描き出し、新たなまちづくりへと繋げていくことが重要。

オホーツクの海が育んできた歴史的な広がりの中で、人々はどうのような物語を紡ぎ、何を生み出してきたのか、実際の場所で、本物を目にしながら肌で感じることができるよう、「み・ち・あ・た・ま」という言葉を提唱する。

- ・地域の自然を**見**てもらい（み）、
- ・歴史を**知**てもらい（ち）、
- ・様々な場所を**歩**いてもらい（あ）、
- ・地域ならではの自慢の食材を**食**べてもらうことで（た）、
- ・**学**びにつながっていく（ま）

【参考】先進地事例調査から学ぶもの

1. しまなみ海道（愛媛県今治市、広島県尾道市）

しまなみ海道は、広島県尾道市から愛媛県今治市までの60kmにわたる自動車専用道路で、70kmにわたるサイクリング道も整備されている。この地域では、DMOの「しまなみジャパン」などが観光情報発信や体験ツアーの開催、サイクリングPR、食のブランディングなどの幅広い取り組みを通じて、観光客誘致や地域の活性化に貢献している。しまなみ海道の成功要因として、キーマンを中心に計画を進め、意識改革や活動支援を継続して市民や企業を巻き込んだ社会活動が挙げられる。参考点としては以下のとおりである。



（出典：JB 本四高速 HP）

- 地域連携の強化**：20の市町と観光協会が連携して地域振興に取り組む。
- 観光資源の多様性と連動**：自転車を中心にした観光の成功を基に、歴史や文化、自然環境などの多様性を活かす。
- 地域の特産品や食文化の活用**：地域の特産品や食文化を活かして町おこしを意識したマーケティングを行う。
- サイクリスト向けの施策**：自転車やバイクの通行料を無料化してサイクリングを促進し、観光を支える。
- 国際的な評価の重要性**：国際的な観光に貢献し、地域の文化が世界に通用するコンテンツであることをアピール。
- 地域資源の最大化**：地域内外の魅力を発掘し、観光業界・商業界・サービス業界全体で意識を高める。
- 広報と観光案内の充実**：国際的なメディアでの広報活動が成功し、観光地の知名度向上に寄与。
- 組織体の確立と連携**：各自治体や地域関係者が連絡会を組織し、円滑な合意形成や連絡調整を図る。
- 中長期的な視点での取り組み**：構想計画と強い信念のもと、3年、5年、10年といった中長期的な視点で地域振興を進める。

2. 熊野古道（和歌山県田辺市）

熊野古道は、世界遺産登録に伴い田辺市を中心に5市町が合併し、地域振興を目指してツーリズムビューローを設立。外国人観光客の誘致と地域の発展を同時に進めている。外国人の視点を大切にし、英語が話せるスタッフを駅前の案内所に配置し、欧米の個人旅行者をターゲットにしている。さらに、オンラインでの着地型旅行会社も運営。質の高いガイド育成も積極的に行い、現金対応しかできない民宿の支援や後継者の育成も支援対象としている。地域住民を巻き込んで問題解決や意識改革を行い、語り部ジュニア（歴史ガイド）の養成や森林環境税を活用した教育旅行の受け入れも計画している。



（出典：新宮市観光協会 HP 熊野古道）

- 地域づくりと第三セクターの設立**：熊野古道では、田辺市を中心に5市町が合併し、ツーリズムビューローを設立。オホーツク地域も同様の地域組織、協議会、またはDMOの設立を検討することが求められる。
- 外国人観光客の呼び込みと広域プロモーション**：外国人観光客の誘致と地域振興を同時に進め、特に関心が高い外国人観光客をターゲットにしたプロモーションや、地域の特徴を強調する広報活動の強化がカギとなる。
- 多言語対応と地域通訳案内士の養成**：英語が話せるスタッフを配置するだけでなく、多言語対応や通訳案内士の養成を急務とし、観光者との円滑なコミュニケーションを図れる人材を育成していくことが不可欠。



両街道の成功の背後には、関係者や組織が確固としており、特に熱意あるキーパーソンや推進者の存在が際立っている。新たな才能の発見や育成活動が積極的に行われ、具体的な構想や計画に基づき、徹底的なマーケティング活動が展開され、ブランディングから魅力の発信までを継続的にを行い、地域メンバーで成果を生む仕組みが構築されたことが成功の鍵であると言

える。

オホーツク遺跡街道構想においても、この成功事例に倣い、構想や計画を具体的に固め、魅力ある地域づくりのために、ソフト面やハード面の整備、交通インフラなどの整備に5年、10年、50年という長期的な視点で取り組む必要がある。それとあわせて、一緒に構想に向かって進んでいく仲間づくり（組織作り）が重要と考える。

【参考】専門家ヒアリング

1. 東京大学大学院人文社会系研究科教授 熊木俊朗 氏

（常呂遺跡のすごいところ）

- ・この遺跡は何がすごいのかというと、一つは大規模な遺跡、道内でも有数の規模の遺跡が非常にいい状態で残っているということ。くぼみで残る竪穴群は、北海道では東の方を中心にたくさん見られるが、その中でも一番規模が大きいのは「標津遺跡群」を中心とした標津町の竪穴群。町内全体で4,800軒ほどのくぼみが残っている。
次に多いのが「常呂遺跡」を中心とした常呂の竪穴群。旧常呂町内全体で3,000軒ほどの竪穴が残っている。そういう大規模な遺跡があるというのがまず特徴の一つである
- ・それから二つ目は各時代を通じて大体途切れなく、連続して人がここに住み続けていること。旧石器からアイヌの時代まで、道内を代表するような遺跡が同じ地域に連続して形成されている。大規模な遺跡がある所は他の市町村にもたくさんあるが、旧石器からアイヌの時期までずっと連続して遺跡があるような所は意外と少ない。

（世界遺産の動き）

- ・今、北海道教育庁と古代遺跡のある自治体が連携して、竪穴群遺跡にはどういう価値があって、その価値をどう普及・活用していくかという懇談会が立ち上がり、今後の保存活用の指針となるような計画案を取りまとめている。
- ・世界遺産に関しては、まずは日本の中で暫定一覧表に記載されないと世界遺産に推薦されない。世界遺産登録の話があった時、北海道からは二つ、窪みで残る竪穴群と縄文の遺跡群が一覧表の候補として推薦されて、審査の結果、一覧表に載ったのは縄文の方だった。その後は地元からの推薦という形での募集は行われていない。

（竪穴住居について）

- ・現在発掘調査をしている竪穴住居跡は擦文の焼失住居。住居が廃絶された際に焼かれたもので、屋根などに用いられた材が炭化した状態で結構残っている。炭化材の分析では、どういう樹種を使ってたとか、炭素から年代も測定できる。最近は、土器の焦げを分析することで何を食べていたかもある程度わかる。

2. 元紋別市博物館館長 佐藤和利 氏

（オムサロ遺跡について）

- ・オムサロ遺跡は、オムサロ B は縄文早期7千年前、オムサロ C は縄文の後期から続縄文、オホーツク、奥にはチャシもあるのでアイヌ文化期までである。旧石器はない。オムサロのオホーツク文化の竪穴住居跡は1軒と墓が2基見つかっている。

（オムサロ竪穴住居と当時の暮らし）

- ・この家で4〜5人ぐらい暮らしていた。竈と囲炉裏があり、囲炉裏からは煙が出て燻煙状態になり、それが虫よけと建物を長持ちさせた。（ただし、現在ある復元家屋は10年持たない。保安林のため、家で火を焚けないから。）
- ・昔の人はここで鮭をとって暮らしていた。昔はカニも砂浜に寄ってきて、それを捕った。鹿はアイヌ語でユクと言い、我々が食べるものという意味で鹿も熊も食用にしていた。
- ・サハリンアイヌは、一人600匹のサケを獲ると一冬を越せると言われている。アイヌにとって鮭は米。

（司馬遼太郎さんのこと）

- ・オムサロネイチャーハウスができる前は、そこにドライブインがあった。そこを取り壊してネイチャーハウスができたのだが、そのドライブインがあったころ、30年前、司馬遼太郎さんがオホーツク街道の執筆のためここに来た。司馬さんはここから海を見ながら、次の歌を詠み、その色紙をいただいた。

降る雪の 冬海は青み 昏き世の オホーツクの むかし 偲ばゆ

- ・オホーツク遺跡街道の遺跡の文字を取れば司馬さんのオホーツク街道である。これを体感してもらうにはやはり人。ツアーを組んでも案内できるのは、当時司馬さんと関わった常呂の武田さんと網走の米村さんと私ぐらいかな。そういう人の体験談などの話を聞かないと、なかなか司馬さんとオホーツク文化の人を惹きつける本当のところは理解できないかもしれない。

3. 札幌国際大学人文学部国際教養学科教授 遊佐 順和 氏

(新しいものをつくるより、今ある料理や食材に付加価値をつける)

- ・オホーツク文化を再現した料理を創作し、それが流行し、そこに人が集まってくれるかとなると、それはその料理の話題性、料理商品の告知、売上見込みを鑑みた飲食店の参加などからも、すぐに実現させることは難しいと考えられる。
- ・滞在性とオホーツクの食の良さを余すことなく発信し、さらにそこに歴史を感じさせる仕掛けづくりが必要と思う。その意味で、新しいものを作るより、今あるものに物語等の付加価値をつけて紹介した方が良い。加えて、まちごとにその魅力を伝えられる伝道師的な「人」の存在が欠かせない。

(今まで価値を見出されなかった食材にも光を当てる)

- ・安定的に獲れない、通常は廃棄・リリースしてしまうような魚でも地元漁師が食べ方を知っているというようなことがある。その部分にも光を当てて考えると、これまで食材としてフォーカスされなかったものに注目し、そのうま味を試作で見出して料理メニューを創作して提供することも一つの方法である。

(新しい発想で地場の食材を生かす)

- ・アメリカ料理のクラムクチャウダーやスペイン料理のアヒージョのような外国由来の料理をオホーツク風にアレンジして、オホーツク産のシーフードや野菜を盛りつけた料理を提供することも考えられる。足元にある地元食材の活かし方や組合せを考えて、このようにバリエーションを広げたらどうか。もちろん、こうした料理をオホーツクならではのロケーションの良い場所で食べてもらうことが重要となる。

4. 北の縄文道民会議常務理事兼事務局長 戎谷侑男 氏

(北の縄文道民会議)

- ・約 20 年前、『これからは縄文文化の時代が来る、縄文のことをもっと勉強したら』と盟友 H 氏から言われ、さっそく函館市南茅部の大船遺跡、垣ノ島遺跡を見学に行き、縄文文化の不思議な魅力に高揚感を覚えた。その H 氏の提案で 2007 年に有識者 100 人による「北の縄文文化を発信する会」をつくった。ここには産官学から賛同する方々が集まり、縄文文化を広め、認知されるよう発信することになった。
- ・一方、北海道庁でも縄文世界遺産推進室をつくり登録に向けて活発に動き出した。
- ・その後 2012 年に民間の活動・応援が重要であると北海道庁から依頼があり、民間の団体として「北の縄文道民会議」を設立する動きが出て、当時私が代表を務める CBT（シービーツアーズ）にその事務局を置き、事務局長も兼務することとなった。初代表は世界遺産構想を提案した堀達也元知事で副会長には経済界団体のトップが就任した。

(縄文の魅力)

- ・私が縄文遺跡に魅せられたのは、ほとんど地中に埋没されている遺物から、根拠のある想像力によって理解できることが多くあり、自分の思いで縄文文化を汲み取ることができる、それが大きな魅力と思う。
- ・発掘された土器や土偶などの遺物を見ると、私たちに会いたくて出てきたのかなと感じることがある。そこを発掘したのがまさに奇跡のひとつで、1メートル違えば出てこない。
- ・縄文文化のもう一つの魅力は美的センスの高さ。土器や土偶をみると、そこには摩訶不思議な文様があり、意図的に描きこんだのか、どんな意味があるのか、考えてみると面白くてたまらない。

(重要な語り部の確保)

- ・縄文旅や北海道遺産バス旅で共通の課題となっているのは、魅力的な説明ができる「語り部」の不足。高齢化・少子化で、若い人が育っていない。なぜなら、案内ガイドは処遇に恵まれていないのが実情で、支払うのは交通費のみの所もある。有資格あるいは経験者ということで、もっと優遇すると担い手も育つのではと考えている。
- ・このような方たちは専門的な知識や経験を持っているので、常にリスペクトした待遇、処遇を考える必要があり、それが大事だと思う。語り部の問題に関しては、みんな課題はわかっているが踏み込まないだけ、それが問題だと感じている。

5. (株) ZERO PLANNING 代表取締役 増井淨美 氏

(アジアの人は歴史にあまり興味はない)

- ・16年ぐらい前から、あるきっかけでガリンコ号の海外営業の仕事をしていただいている。
- ・その仕事をしている人間の感覚として、アジア圏の人は全般的に歴史に関してあまり興味を持っていないと思う。網走の北方民族資料館には何度か行ったが、あまり興味を示さなかったように感じた。彼らは、どちらかというと、自然をテーマと

- した街道や建物に関して興味を持っている。そのほかは食ること、特にカニは大好きである。
- ・ただし、アジア圏以外の欧米豪の人たちは滞在期間が長く、歴史にも興味があるように思う。
- (みんなオホーツクのことを知らない。アニメをうまく活用)**
- ・オホーツクにはいろいろ歴史資源があるが、みんなあまり具体的なイメージを持っていない。実際、紋別の博物館に行ったとき、こんなにも展示品があるとは思ってもみなかった。見るのに時間が足りないくらい、ただみんな知らないだけ。
 - ・歴史関係に関しては、これからはアニメのゴールデンカムイがきっかけになりそう。アジアの若者は名探偵コナンなどのアニメを子供のころから見ており、アジア向けにはそうしたキャラクターをうまく活用してPRするのがよいと思う。
 - ・いわゆる紙のパンフレット類は、最近中国ではほとんど見かけなくなった。みんなスマホで完結している。
 - ・ガイドの必要性は感じるが、アジアの外国人観光客(団体)はガイドを一緒につれてくるので、それほどこちらのガイドは求めない。
- (オホーツクの課題はいいホテルがないこと)**
- ・オホーツクの課題は、とにかくいいホテルがないこと。網走はまあいいとしても、そこから北にはそうしたホテルがない。外国人は最初に宿泊するホテルから目的地を決めていく。良いホテルがない観光地には寄り付かない。
 - ・紋別から北の方に行くツアーを企画したいが、やはりホテルが課題である。

【参考】オホーツク遺跡街道の実現で想定される経済効果（令和5年度報告書より）

オホーツク遺跡街道構想の推進で、オホーツク文化などの歴史資源が注目されることにより、地域にとって様々な波及効果が予想される。その一つが経済効果である。経済効果を推計する前提となるのは、観光客数がどれだけ増加するかであり、これについては以下のような予測を行った。

●推計方法と結果

- ・人々の歴史観光に対する関心度により、「非常に興味ある」「少し興味ある」「興味がない」の3つの層に区分し、現在のオホーツク地域の観光客数及び一人当たり観光消費額より、各層の観光客数及び観光消費額を算出した。
- ・さらに、この中で、新規需要が見込まれる層として「非常に興味がある」人たちに限定し、今後の周知活動等により、彼らのリピート率が高まることを想定、それによる観光客数が年1%ずつ増加すると仮定し、10年間の推計を行った。
- ・これに観光客一人当たりの消費単価を乗じて、オホーツク管内の観光消費額を計算し、10年後の観光客数、観光消費額の増加分を算出した
- ・この結果、10年間でおよそ観光客数が2万人増加し、これに伴う観光消費額がおよそ5億円増加することが予測される。

オホーツク地域における歴史観光の将来需要の想定

		推定割合 (A)	推定観光客数 (B)	平均消費額 (C)	推定消費額 (D)	10年後の観光客数 及び消費額	差引
非常に興味がある	非常に興味がある	15.2%	197,265人	24,740円	4,880,336千円	217,938人 5,391,786千円	20,673人 511,450千円
少し興味がある	少し興味がある	52.6%	682,643人	24,740円	16,888,588千円	—	—
興味がない	興味がない	32.2%	417,892人	24,740円	10,338,648千円	—	—

(A 推定割合) 認知度調査（今年度行ったウェブアンケート調査結果より）

(B 推定観光客数) 「令和4年度オホーツク管内宿泊客数」（北海道観光入込客数調査より）オホーツク総計 1,297,800 人

(C 平均消費額) 網走市「観光消費動向調査」（平成29年3月） 網走市内で消費した一人当たりの平均金額

(D 推定消費額) B×C

・歴史観光に対する関心度により、3つの層に区分しそれぞれの観光客数を算出

・これに日本人一人当たりの消費単価（H28年網走市消費動向調査より）を乗じて、それぞれの平均旅行費用を算出

、ロードマップに示したオホーツク遺跡街道実現に向けての各種事業の側面的な支援もその一つであ